"ミュンヘン"への道

ルーマニアで強化合宿を無事終えた全日本男子は、想像以上にきびしい練習に明け暮れたようだ。

今回の遠征メンバーは文字どおり日本のトッププレイヤー。球歴も充分な選手ばかりなのだが、村田監督の便りには、これらの選手にとっておそらくはじめてのハードトレーニングだろう。これをのり切るにはたくましい精神力あるのみと書かれている。

これはとりもなおさず、ルーマニアの、というよりヨーロッパのナショナルプレイヤーがいかにしれつな競争の中から生まれているかを示すものであろう。

本場ヨーロッパと日本の差については、これまでいろいろ取り沙汰されて来た。

立地条件、競技人口、一般の関心・普及度、強化体制の確立etc。

しかし、本場のトッププレイヤーが、ナショナルチームに加ることを目標に、いかに努力をしているかを聞くと、彼我の差は、実に精神力―"この一点"にあるのではないかと思ったものだ。

今回の合宿の模様を聞いて、この考えが的はずれでないことを知った。

日本のトッププイレヤーがこれまで努力をしていなかったというのではないし、コーチングスタッフの指導が適切でなかったというのでもない。

わが国の努力以上に、ヨーロッパの多くの国は必死の精進をつづけているということになるのだ。

ルーマニアの練習は徹底した基礎練習の反復だそうだ。

日本のハンドボール界が近頃忘れかけていることではないか。厳しい指導者が残っている高校界はともかく、トップゾーンとして自他ともに許す学生界は、特にこの風潮が強い。

古いOBたちが「われわれの頃は……」といって語り出す昔の練習ぶりや精神論を現役選手はあまり好まない。練習法にももちろん進歩があってしかるべきだが、問題は"心"だ。

外国ナショナルプレイヤーの持つ"心"の真の意味を全日本代表が持ち帰ってくれたなら、これは何にもまさるおみやげであり、大望の成就へ大きな歩みを遂げることにつながろう。

（杉山）

時評

▼全日本学生連盟がいよいよ規約改正に手をつけることになった。いよいよというよりようやくと云ったほうがよいかも知れない。

この話をあるOBに伝えたら「改正？、制定ではないの」と云った。学連規約の有名無実を物語るエピソードだ。

ルーズな運営を続けながらトラブルをひきおこさなかったばかりか、最近では女子の東西対抗発足、全日本学生王座の廃会学生選手権開催期の移動など次々に新しい手を打っているのは不思議でさえある。四～五人のOBの情熱でいっさい処理してしまい、強硬な苦情も出ぬままに来たのだが全国組織というからには、このような状態が続けられてよいわけがない。

これまでの事情を知る者にとってはかえってかたくるしくなるだろうが、それが常道なのだ。

真の発展は確立された組織によって成されるのであり、よりよい運営のシステムを考え出して欲しい。

"学連・学生界としての活動"を待望しているのは筆者だけではないと思う。

▼前号のこの欄で、日本協会は"外の声"を聞く姿勢に乏しいということを書いたが、最近では、加盟団体との意志疎通もあまりうまくいっていないようである。

例えば、夏の全日本総合選手権へ推せん出場させる各加盟団体のワク数について日本協会はなんら公式の指示を関係者へ与えていない。そのため、6月10日の申込み〆切日に3加盟団体から推せんが届出られないといううしゅう態が演じられている。

また、7月に開催が内定した全日本自衛隊大会についても日本協会―実連―自衛隊関係者の連絡不充分でせっかくの構想もいちぢは流会寸前までに追いつめられたと聞く。

選手強化対策委員会の申し合せをけった全日本候補選手の国内試合規制についても同じことがいえる。

この処置は各チームや当の選手たちからも批判・不満の声があがりながら日本協会は強引に押し通すつもりのようだ。世界選手権直前のシーズンにトッププレイヤーの国内試合出場を止め、いったい何を資料に選手を選考するというのだろう。

筋の通った施政を望みたいものである。

（S）

「ハンドボール」7月号（第66号）目次

表紙写真
韓国遠征校選考試合
日体大―関西大戦
（6月2日駒沢）
撮影・山田真市

実施近ずく世界選手権基金運動 募金委を新設

～全国評議員・理事が賛否投票～

高校生10円、一般は20円の募金

日本協会常務理事会（合議スタッフ）の原案による「世界選手権基金」については、本誌既報のとおり4、5、6月の月例常務理事会で検討・協議が重ねられた結果、この運動の円滑な運用を企るため募金委員会を新設することに意見の一致をみ、「委員会規程」の制定を決めた。

規程案の全文は次頁掲載のとおりで、大要は本誌前号の報道と変わりないが、注目の募金額については、6月13日の月例常務理事会で別表のように決定、「委員会規程」の「細則」として附加されることになった。

高校選手に関しては年に2回を限度として徴収、全日本高校選手権の各予選と各地方組織の新人大会参加者に限定している。高校選手（チーム）が一般の、例えば総合大会に出た場合は一般選手の半額を集めることになった。

また、募金の対象となる全国大会は現行6大会のうち全日本高校と全日本選抜を除く4大会とすることも正式に申し合わされた。国体も除外される。

日本協会では、当初この運用実施に関する問題を審議するため、6、7月中に全国評議員会、全国理事会を臨時招集することにしていたが、なるべく早く実行へ移したいという意向があり、6月30日〆切りによる「郵便決議（投票）」で承認を求めることとなった。

現在、全国評議員は51名、同理事は29名で、日本協会規約第7条の3、第9条の2により、2分の1以上の賛成が得られれば成立する

協会役員などによる賛助金については

一、日本協会評議員　一人一万円
一、実業団オーナー　一人一万円
（いずれも年額）

とし、このほか賛助者から一口一万円の寄附を募ることになった。

6月13日の会議では施行期日についても論議され、さかのぼって4月20日以降開催の競技会から適用したいという意見も述べられたが、7月1日からということに落ち着きそうだ。

しかし賛否投票の〆切りが6月30日であり、この運動の要とも思える募金委員の人選などの時間を考えれば7月1日を期しての施行はかなり難しいと思われ、この点に関してはなお検討が必要で、消息筋は早くても8月1日とみている。

世界選手権基金募金額（案）

○高校選手	1人	10円
○学生及び一般選手	1人	20円
○一般大会に出場の高校選手	1人	10円
○各大会参加役員	1人	20円
○全国大会（規程第11条）参加チーム	1チーム	200円
○全国大会（同上）　参加役員	1人	20円

また、評議員・理事側は運動の主旨にはまったく異論がないとしながらも、規程案、細則案にはかなりの意見が寄せられるとみられ場合によっては大きな修正が加えられることになろう。

球界の発展にも影響

ところで、来春の第7回世界男子7人制選手権（フランス）は、航空費だけで一人約49万円かかる役員4名、選手14名が派遣されるとして最低882万円が必要だ。

5月30日体協が承認したこの大会への補助額は455万円。差額427万円は日本協会が自己調達しなければならない。今回の基金運動の初年度の目標額は一応150万円といわれ、調達額の35パーセントを占めることになる。（注・残りの金額は協会資産により処理される予定）

目標額150万円は、学生以上の募金額を前号で報じた10円から20円に、チーム募金額も200円に引きあげているため、高校関係で約20万円大学・一般で約33万円、全国大会関係で3万円、役員による募金10万円と推定され計66万円。これに評議員からの賛助金51万円が加わり実業団オーナー、賛助者から40万円集まれば一応達成されることになる。しかし、すでに新年度になって3ヶ月を経過、大口ともいえる全日本高校選手権各県予選や学生リーグ(春季)などが終わっており、選手、役員・チームからの66万円はかなり減少されると考えねばならない。今回は初年度でもあり0からスタートするわけだが今後は3年または2年間蓄積が可能、運動そのものが軌道にのれば自己調達額の8割以上をまかなうことも有望であろう。

それだけに、なんとしても成功させなければならないわけだが、カギは一にも二にも各組織、各加盟団体の〝協力〟にある。

今でさえ日本協会の財源はすべて、こうした下部からの加盟金や登録金によって支えられており、そのうえに今回の運動が加えられるとなると、地方協会や各加盟団体の日本協会に対する発言力などは非常に大きなものとなろう。日本協会がこれまでともすればみられたような「地方不在」の施政を行うようだと中央―地方離脱という事態も招きかねない。

「世界選手権基金」運動は、日本協会の消長にもつながる重要なポイントになってくるわけだ。

世界選手権代表の個人負担をなくそうという趣意は、球界あげての気持ちでもあり、高校選手をはじめ関係者は〝夢〟を託して拠金に努めようが、その運用の周辺には多くの問題がひそんでいるといってよいだろう。

世界選手権基金募金委員会規程 案

第1章　目的及び事業

第1条　この委員会は日本ハンドボール協会（以下「協会」と略称する）が世界選手権に選手を派遣するための資金を調達し、これを保管することを目的とする。

第2条　この委員会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

1、選手及びチーム役員による募金。
2、全国大会出場チーム及役員による募金。
3、協会役員による賛助金。
4、資金調達事業の開催
5、その他この委員会の目的達成に必要な事業。
6、資金の適正な保管事務

第2章　委員会・委員・監査委員

第3条　この委員会は委員若干名及び監査委員2名を以って構成する。

第4条　委員は本部協会委員、地方協会委員、高体連委員、学連委員、実業団連委員、教職員連委員に分かち、本部協会委員は協会理事会之を選出し、地方協会委員は協会支部理事会之を選出し、高体連・学連・実業団・教職員の各委員は、それぞれの連盟之を選出する。

第5条　委員会には委員長1名及び常務委員若干名を置く。委員長及び常務委員は、委員の中より協会会長之を指名する。

第6条　監査委員は協会理事会に於いて選出する。

第7条　委員及び監査委員の任期は2ケ年とする。但し重任は妨げない。

第8条　委員はこの委員会の事業を遂行し、委員長は委員会の責任者としてこの委員会を代表し常務委員は委員長を補佐する。

第9条　監査委員は委員会の事業の執行及び会計を毎月1回または必要と認めたときは随時監査し、協会理事会に報告しなければならない。

第3章　事業の執行

第10条　選手及びチーム役員による募金は左に掲げる大会に於いて、エントリーされたる選手及びチーム役員を対象とする

1、高校大会
イ、全日本高校選手権の各都道府県予選大会
ロ、各都道府県新人大会
2、学生大会
イ、各地区学生連盟による大会
ロ、複数の地区学生連盟による大会
ハ、各都道府県単位の大会
3、一般・総合大会
イ、各都道府県単位の一切の大会
ロ、各都道府県協会主催による各地総合選手権大会に出場の高校選手
ハ、各地区大会

第11条　全国大会出場チーム及び役員による募金は左記大会に出場、参加したチーム及び役員を対象とする。

1、全日本学生選手権大会
2、全日本実業団選手権大会
3、全日本教職員選手権大会
4、全日本総合選手権大会

第12条　前2条の募金につき各人又はチーム当りの募金額ならびに募金の方法は委員会に於いて決定し、協会の全加盟チームに予め通知する。

第13条　第10条に定めた募金は担当の各地方委員又は学連委員の責任に於いて、又第11条に定めた募金は本部委員の責任に於いて各実務を行ない、集計せられたる金額は大会終了後5日以内に所定用紙と共に委員長宛送金しなければならない。

第14条　協会役員は、その役名に応じ年額一定の賛助金の額及び拠出の時期方法はこの委員会に於いて定める。

第15条　協会が自ら主催し、又は地方協会その他の団体と共催してこの委員会の目的達成のための事業を行なった時は、その純益はこの委員会に送付されなければならない。

第16条　前3条に基いて委員会が金員を受け入れた時は、必ず協会理事会に報告し、同時に監査委員に通知されなければならない。

第17条　受け入れられたる募金、拠出金その他一切の金員は、最も安全にして有利なる方法を以って保管すること。

第18条　委員会が保管中の金員は協会理事会よりの要請に基き協会に引渡すべきものとする。

第4章　附　則

第19条　この規定に定めない事項で委員会の運営に必要な事項が生じた時、又はこの規定を改正する必要が生じた時は協会理事会が之を定める。

第20条　この規程は昭和○年○月　日から施行するものとする。

日本ハンドボール協会世界選手権基金募金委員会細則（案）

1、日本ハンドボール協会世界選手権基金募金委員会規程（以下「規程」と略称する）第10条の募金金額は左記の通りとする
1、高校大会　1人10円
2、学生大会　1人20円
3、一般・総合大会　1人20円
但し高校生選手は1人10円
4、上記各大会参加役員は3に同じ

2、規程第11条の募金金額は左記の通りとする
大会参加1チーム　200円
役　員　1人　20円

3、規程第14条の募金金額は左記の通りとする
1、協会評議員　1年1万円
2、実業団各オーナー　1年1万円
3、賛助者　1口1万円

4、募金の納入書は別紙の通りとする（略）

5、この規程および細則は昭和44年4月20日以降開催の競技会から施行する。

▼編集部注・細則4は略。

昭和43年の決算終わる

日本協会では昭和43年度の総合収支決算を発表した。それによると一般会計・機関誌会計の収入合計額は一二、六八五、五八二円で、収支差益一、六五二、六二八円が次期へ繰りこされた。

うすらいだ外人コンプレックス

～全日本男子、ルーマニア合宿終わる～

厳しい心・技の訓練に終始

5月15日からルーマニアのブカレストでルーマニア協会指導のもとに強化合宿中の全日本男子ナショナルチーム村田弘監督らコーチ・選手20人は、6月17日のルーマニア・ナショナル（B）チームとの〝仕上げ試合〟をもって約一ケ月にわたるその日程を全員故障なく打ちあげ、ハンガリー（6月19日～24日）、ユーゴ（25日～7月2日・タスマジャン・カップ争奪トーナメント出場）、西ドイツ（2日～12日）フランス（13、14日）を転戦して7月16日午後5時50分、羽田着のフランス航空機で帰国の予定である。

村田、勝、竹野の3氏から寄せられた便りをもとに、ルーマニアでの情況をさぐってみた――。

今回の合宿の狙いは来春フランスで開かれる第7回世界男子7人制選手権で上位入賞を果たすためにあり、それだけにかなりハードな練習が毎日つづけられた。

指導は、昨秋大崎電気の招待で来日したルーマニア協会コーチニコライ・ネデフ氏が中心となり、かってのナショナルプレイヤーが補佐役として加わった。

ルーマニアは今が初夏、盛夏へむかうところとあって連日35度近い厳しい暑さに見舞われ、しかも練習は屋外が多く、これには選手たちもかなりとまどったようだ。

ルーマニアナショナルチームの練習計画とほとんど同じというその日課は、さすが世界最上位に君臨するチームにふさわしい激しいもので、日本選手は歯をくいしばり、死にものぐるいという表現が少しも大げさではないほどだった

村田監督は『日本選手の誰もがこんな苦しい練習はハンドボールを始めてから、初経験だろう』といっている。

すべてにかかる〝克己心〟

練習の根底に流れているのは〝克己心〟のようだ。

一つのことにじっくり時間をかける。例えばディフェンスのフットワークの練習は、1分間のフットワークにジャンプ、ダッシュなどいろいろな種目を入れ、これを2時間連続させる。

この繰り返しだけが、すべてであり、選手たちは精神的にまず参ってしまう。

トレーニング・センターにおけるサーキットも日本で行われているものとはかなり内容が違う。

体力づくりにあわせ精神づくりも進められているところは、いかにヨーロッパのナショナルプレイヤーが、厳格な条件を要求されしかも、心・身・技が備えられていなければ決してその誇りある選手になれぬことを物語るものだ。

防禦の強化、いぜん課題

6月に入ってからは基礎練習から組織練習（チームプレー）へ移り、コーチ団は『コンビネーションの基礎が固まりかけはじめた』と伝えて来ている。

課題といわれるディフェンス力もかなりよい方向に向かっているようだが、実戦（別掲）ではやはりまだまだもろさを完全にぬぐい去ってはいない。

世界のベストエイトに入るためには、防禦力がカギだということが再認識された。

心配されていた日本側コーチ団とルーマニア協会の考えかたのギャップは、ネデフ氏の指導理論が村田監督、勝、竹野両コーチと同じであったことから霧散した。これは今回の合宿を成功へ導く一つのポイントになったといってよいだろう。

トレーナー講習会にも参加

このほか、6月2日からスナゴナに在る国立トレーニングセンターで開講されたトレーナー研修会にも、コーチ、選手を問わず積極的に参加た。この研修は、ルーマニアの有力クラブのトレーナー（指導者）百十五名を協会が招待して開くもので午前中は講義、午後からは実技が行われている。

組織だった指導理念には一行も驚嘆させられたようで、ルーマニアハンドボール界の強さの秘密の一端がうかがい知れる。

特筆すべきナショナルBからの2勝

ボインツア杯にも優勝

選手たちは事故（病気・負傷）もなく、元気に毎日の日程を消化したが、チームワークも申しぶんなかったようである。

ハードトレーニングのあいまをぬっての実戦が重苦しいムードをときほぐすのに効果をあげたともみられ、コーチ団の今回の強化プランは上々の成果をおさめた。

滞在中14試合が行われているが試合ごとに大柄、長身の外人選手に対するコンプレックスを取り除くことができたのは大きな収獲である。過去、国際舞台を踏むたびに、外人選手の体格的な〝カベ〟が障害となって来た。これを突破するには外国チームとの試合に慣れる以外ないといわれていた。苦しい条件のなか8割以上の勝率をおさめたのは立派で、6月16、17日ルーマニアナショナルBを15―13、12―11と連破したのは特筆大書すべきことであろう（詳報次号）。ボインツア杯獲得（7頁参照）も今回の強化合宿が大いに意義のあったことを示している。

まずソビエトと対戦

タスマジヤン杯大会

ユーゴ協会は、6月26日からベオグラードで行う第9回タスマジャンカップ争奪国際トーナメントの出場国と日程を正式に発表した。

当初、参加が予定されていたフランスの代りにハンガリーが出場5ヶ国6チームによるリーグ戦で争はれる。日本の日程次の通り。

▽6月26日、ソビエト▽27日　ユーゴ▽28日、ルーマニア▽30日　ユーゴ選手権優勝クラブ（予定）▽7月1日　ハンガリー

ルーマニア各地を転戦

強化合宿のあいまをぬって全日本男子ナショナルチームはルーマニア各地を転戦、14試合を行い10勝2敗2引分の成績だった。第9戦までの模様をお伝えしよう。

▼第1戦（5月22日・ボインツア）

全日本 16（7―9、9―7）16 ボインツア
引き分け

	【ボインツア】	得	【日本】	得
GK	パプク	0	本田	0
GK			下里	0
FP	ドミトル	2	福本	0
FP	ミハイル	5	飯田	3
FP	ステアァン	3	有永	0
FP	氏名不詳	1	平岡	2
FP	ツルスギー	1	近森	5
FP	レレテアク	1	木野	1
FP	ニタ	0	中井	1
FP	D・ポペスク	2	早川	0
FP	M・ポペスク	1	近藤	2
FP			野田	2
7MT	（2）	16	（1）	16

▽日本FP竹野、北井、井上、藤中、東。（いずれも得0）

（評）ボインツアはルーマニアA（1部）リーグでステアウア、ディナモに次いで3位の強豪。長身の選手を揃えている。

日本のスローオフで始まったが先制を狙った有永のロングシュートがポストに当たりはね返るところを拾はれて速攻をうけ先取点を許した。

しかし、飯田の連続得点ですぐに逆転、その後も先手々々をとって日本が有利に試合を進めた。

しかし、初めての、しかも久しぶりの実戦とあって足が重く、時間の経過とともに攻めては速攻ミス、守ってはフリースロー、ポストプレーに対するツメが悪く、大きく点差をあけることができなかった。

後半に入っても一進一退がつづき、失点はほとんどがパスミスとシュートの失敗から相手の逆襲をうけたもので、このあたり帰陣の遅さを反省させられた。

後半25分、15―15から木野のロングシュートで16―15とリード。相手の必死の攻撃をよく守り、3回の加点機をつかんだのだがオーバーステップ、ダブルドリブル、パスミスと凡失から逸し、29分45秒同点のシュートを許して勝てる試合を分けてしまった。

遠征初のゲームとあって、全選手を出場させ、外人選手に対する経験をつませたのだが、そのためにメンバーチェンジがひっきりなしとなり、コンビネーションが乱れた。

本田、下里、野田、平岡、中井などの若手が、自分の持ち味を存分に発揮したことは心強い(竹野)

第2戦も決め手なく分ける

▼第2戦（5月25日・ガラミノ。観衆千五百）

全日本 13（8―5、5―8）13 ガラミノ
引き分け

	【ガラミノ】	得	【日本】	得
GK	ペトレ	0	本田	0
FP	コムスタムテイム弟	0	飯田	2
FP	シビリオ	1	野田	3
FP	ジミオルチ	2	有永	0
FP	デイム	1	近森	3
FP	フロリカ	0	東	1
FP	ヌタムテイム	6	近藤	2
FP	ミコラエ	1	木野	1
FP	コムスタムテイム兄	2	竹野	1
FP	ジルバール	0	平岡	0
7MT	（2）	13	（1）	13

（評）ガラミノはAリーグ9位ガラミノの町は黒海を臨んだ人口20万の小都市。ブカレストから大平原をはさんで中を千キロ近く離れている。幌馬車が住きかう風景はいかにも農業国らしい。近代的な街づくりを進めている最中で、古い建物と脊中あわせに高層のいわゆる団地が立ち並んでいる。

この町に外国のハンドボールチームが訪れたのは十何年前の東ドイツ1回だけとかで、日本チームは大歓迎をうけた。女子の試合につづいて正午試合開始。審判は旧ルール（単審制）だ。選手の体格は日本チームと似たようなものでずば抜けて大きな選手は見当らない。

前半は、ヨーロッパチーム独特のポストプレーとトリックプレーを重点的にマークすることとし一線防禦（0・6）を布く。

早い出足と、強いつぶしが成功して、前半3点差のリード。後半に入っても日本のペースで進み、途中4点差とし、そのまま逃げ切れると思えたのだが、終盤疲れが目立ち、そのため攻撃の連けいプレーのタイミングが乱れ、しかも凡ミスが重ってじわじわと追いあげられ、第1戦同よう29分30秒に同点に追いつかれ勝つことができなかった。

この試合で活躍が目立ったのはGK本田。その果敢なプレーは相手の強シュートを再三にわたってストップ、観衆の拍手を浴びた。

（勝）

攻守にいくつかの試み

▼第3戦（5月27日・テミソアラ大学。観衆千五百）

ポリテヒニカ・テミソアラ 17（8―7、9―8）15 全日本

	【日本】	得
GK	下里	0
GK	本田	0
FP	竹野	1
FP	飯田	4
FP	野田	1
FP	木野	5
FP	有永	2
FP	平岡	0
FP	近森	2
FP	近藤	0
7MT	（1）	15

※相手メンバーは不明

（評）前日（ガラミノ）の強行日程でコンディションは悪かった。テミソアラの町は人口20万。ハンドボールの盛んな街で現在ルーマニアナショナルで活躍しているガツ、かってのトッププレイヤーモーゼル、ルドフ（GK）、西ドイツに亡命したシュミットらはこの出身である。

これまでの2試合で、ルーマニアのクラブチームの力がある程度判った。この日はネデフ氏が「これまでの指導の成果をみる」ということでベンチに入りアドバイスしてくれた。

一応満足のようすだったのは我々としても心強い。

特に、前2試合に較べ防禦がよくなったこと、攻防両面でミスが少くなったことなどをネデフ氏は賞してくれた。しかし後半へばからくる凡失、とりわけシュートミスに対しては強い注意をうけた。

今日は策戦としてゲームのペースをうまくつかむこと、後半へばった時にコンビネーションのスピードを考えることを重点にあげた展開面では、ディフェンス第一主義で早い帰陣、ポストの徹底的マーク、45度に位置するロングシューターに対して早く詰めそして早くさがる、反則は強く早く短かく、手をあげてゴールをかくすこと、一線防禦からのピストン方式使用などを試みた。

攻撃面では、固いディフェンスからの反撃チャンスを巧くつかみ速攻に結びつけること、セットの場合ボール保持を永くし相手の防禦ミスをだんだん大きくしてシュートに結びつける、小さい選手の前でパラパン（ブロックプレーの一種）をして飯田、有永、平岡にシュートさせる、セットはシングル・ポストを実行した。

前半互いのミスから失点しあったが、日本は一度もリード出来なかった。

後半6分、飯田の強引なシュートで10—9と初めてリードしたものの、このあたりからへばりが現われ、スピードとコンビネーションがうまくいかず、ディフェンスもワンテンポ遅れ勝ちとなって24分には4点のリードを許してしまった。

このあと気力の速攻で詰めよったが大勢をくつがえすまでには至らなかった。シュートミスさえなければ勝てる試合だった。相手のポイントゲッター・グネス（ナショナル選手、身長196）の8本のシュートをすべておさえ得たのは一つの収穫といえよう。（村田）

苦しい条件の克服を

▼第4戦（5月28日・テミソアラ）

全日本 22（13—9、9—7）16 テヒメタール

【日本】		得
GK	下里	0
FP	木野	6
	竹野	0
	飯田	4
	野田	3
	東	0
	早川	0
	平岡	1
	近森	3
	近藤	2
	有永	3
	藤中	0
	北井	0
7MT		（2）22

※相手メンバーは不明

（評）スローオフと同時にテヒメタールに連続3ゴールを与えその後のなりゆきが心配されたが次第に落ち着きをとりもどし飯田、近藤、木野らの速攻とセットからの変化でタイに追いついた。

しかし、相手の長身からのロングシュート、左腕選手の変則シュートなどになかなか試合の主導権は握れなかった。

前半の終り頃からようやく日本は動きがよくなってたてつづけに加点、後半もスピードに乗った攻防で押しまくった。

選手全員が、昨日必勝を期しながら敗れたため、スタートは気力に欠け、疲れもめだっていたのだが、本来の調子をとり戻してきた木野を中心になんとか勝利を得れた。シューミスさえなければ前半からもっと楽に試合を進めることができたろう。

コートがアスファルト製で思い切ったプレーができなかったことやレフェリーのジャッジング、使用球の問題などもあるが、外国に来ればこうしたハンデは覚悟しなければならず、またこれらを乗りこえてこそ〝真のナショナルチーム〟といえると思う。（竹野）

終盤、一気に逆転

▼第5戦（5月29日・ロブリン。観衆六百）

全日本 17（7—8、10—4）12 ロブリン

【日本】		得
GK	福本	0
	野田	1
FP	近藤	1
	北井	0
	東	0
	中井	1
	早川	1
	木野	5
	平岡	4
	飯田	3
	近森	1
	竹野	0
7MT		（1）17

※相手メンバーは不明

（評）GK福本、FP飯田、有永、近森、木野、東、野田でスタート

相手チームはBリーグの上位。前日戦ったテヒメタールに勝ったり負けたりの実力とかで主力は農民だ。

この試合もまたあっさり先取点を許し、さらに中央からのポストで2点を加えられ0—3と苦しいスタート。

10分ようやく平岡の2本のジャンプシュートで反撃したが、そのあと絶好機を再三にわたって相手GKの好守にはばまれ、1点差をつけられて前半を終了。後半に入っても一進一退だったが、10分を過ぎて相手に疲れがのぞかれ、その機をついて積極的なカットから逆襲の速攻を成功させ15分すぎ、勝利のメドがやっとつく。

選手個々の体調、チームコンディションからみてもう少し活発なゲーム展開を期待したのだが、17得点するのに53本のシュートを射つという非能率的な攻撃で、もう少し確実性、安定性が欲しい。

わずかにタイムアップ前の15分間に連続6ゴールして一気に逆転したことだけが収獲だった。

人口5万の広大な農園都市、いわば片田舎の町なのだがスタンドシャワールーム、ロッカーつきの立派なハンドボール専用コートがあるのには驚ろかされた。試合は午後6時からのナイター、前座に地元の女子ゲーム。（勝）

攻撃の不確実を反省

▼第6戦（5月30日・ルゴシュ。観衆七百）

全日本 19（10—8、9—9）17 ルゴシュ

【日本】		得
GK	本田	0
FP	早川	1
	竹野	0
	飯田	4
	有永	0
	東	0
	北井	0
	近森	6
	平岡	3
	近藤	2
	中井	0
	藤中	1
	井上	1
7MT		（2）19

▼日本FP野田（得1）

※相手メンバー不明

（評）GK本田、FP竹野、飯田、有永、近森、東、北井でスタート

ルーマニア協会が組んでくれた4連戦の最終戦。テミソアラから60Kはなれたルゴシュは人口5万、労働者のクラブチームだ。

午後6時で32度という暑さのため疲れがみえ、コンビネーションの乱れをよんでパスミス、シュートミスが連続、しかも審判員が日本に対する反則を多くとり、これにはいささか参った。海外試合の〝難しさ〟であろう。

前半4分、6戦目にして初めて先取点を日本はあげた。しかしディフェンスの連けいが悪く、すぐに反撃を許し一進一退の経過で後半を迎えた。

相手はホームコートとあってエネルギッシュな動きをみせたが、次第にへばりはじめ、日本はこれに乗じて速攻から加点した。

日本はシュートミスさえなければ、このような時に一気に引きはなせるのだが、この日もその欠点が出てしまった。

なるべく多くの選手を使おうとするためメンバーチェンジがひんぱんとなりFP6人の〝組織〟の崩れがみえるのも一因だ。だがこれは仕方のないことである。

木野が足にマメをつくり、中心を失っていたこと、防禦面での動きの遅さ、当りのにぶさ、ポストの拓さ、攻撃面で不正確なパス、シュートの不安定を反省した。

しかし1試合ごとに外人選手に対するコンプレックスがなくなって来たことと、攻撃のボール保持力が向上して来たことは今合宿に

よる成果の現れだ。（村田）

合宿の成果、優勝飾る

ボインツア杯争奪リーグ

全日本チームは6月5日からルーマニアのボインツァで開かれた「ボインツア・カップ争奪7人制リーグ」に出場、優勝した。参加したのは全日本のほか、ハンガリアのトップクラブ・スパルタク・ブダペストそれにルーマニアのブラショワ・トラクトール、ボインツアの4チーム。

▼第1日（遠征第7戦、6月6日ボインツア・ブカレスト。観衆五百）

全日本 22（10−7、12−9）16 ボインツァ

得	【日本】		【ボインツァ】	得
0	本田	GK	テール	0
0	下里	GK	パプク	0
3	飯田	FP	D・ポペスク	0
1	有永	FP	コセスク	4
5	木野	FP	ミハイル	5
3	近藤	FP	ステファン	2
1	近森	FP	アルボアイカ	1
3	野田	FP	アンヘル	4
1	早川	FP	ニテスク	0
1	東	FP	ペレテアチ	0
0	藤中	FP	スタムク	0
4	平岡	FP	ツルスギー	0
22	（3）	7MT	（2）	16

（評）ボインツァとは第1戦につづいての対戦。

相手はこちらの手の内を知っているとばかり、いきなり木野をマン・ツウマンで徹底的にマークして来た。しかも一線防禦を多用、たしかに日本チームに対する研究のあとを示した。

1、5分にロングシュートを許したが、日本も速攻から平岡、野田が決めた。このあとは文字通りのシーソーゲームであったが、ハーフタイム前、相手が木野のマークをやめてゾーン切り替えたハナを狙って速いボール廻しから得点機をつかみ主導権を握った。

後半に入って一度は1点差に詰められたが、速攻と7MTで連続4ゴールを奪って再び優位。

ボインツァはここでマン・ツウマンからプレスディフェンスに変えて懸命な反撃に転じ、日本の攻撃はかなり乱されたが、慎重に改めそして守り切った。GK下里の再三にわたる堅守も勝因として見逃せない。ポストに対する守りの研究、7MTに対する布陣もあたり日本チームの策戦勝ちといえた。

ボインツァはルーマニアでも上り坂の好チームの一つといわれており、ロングとポスト、サイドを巧みに使いわける。日本としてもやりやすい相手でクリーンゲームだったと思う。ボインツァのコーチ・パーナー氏がネデフ氏とともによくわれわれの合宿に指導に来てくれていたこともたぶんに作用していた。（竹野）

▼第2日（遠征第8戦、6月7日ボインツァ・ブカレスト）

スパルタク・ブタペスト（ハンガリー） 5（2−2、3−1）3 全日本

【日本】		得
GK	福本	0
GK	本田	0
FP	飯田	1
FP	有永	1
FP	平岡	0
FP	近森	0
FP	木野	1
FP	東	0
FP	北井	0
FP	近藤	0
FP	野田	0
7MT	（0）	3

※相手メンバーは不明

（評）激しい雨の屋外コートで午後6時30分試合開始。日本では久しく体験も見もしない〝状態〟だ。

両チームともキャッチミスが続出。とてもシュートチャンスまで持ちこめず、田んぼのようななかでテンポの遅い試合運びとなる。

前半5分、木野が中央からディフェンスのわずかな間をぬって左すみにシュートを決め、つづいて速攻のチャンスがあったが、パスがつながらない。8分、右45度からロングシュートを見舞はれ1−1。しかし日本も有永のステップシュートが鮮やかに決まって再びリード。

足場が悪いにもかかわらず守りは積極的で固かったが、攻撃面では相手のFPが揃って1m80以上ありしかも一線防禦。この壁を突破するのにてこずっている間に1点を返されタイで前半を終った。

後半、飯田のジャンプシュートで先行、気勢をあげたのだが、ここで代ったGK本田がその変りばなに2本つづけて足元を抜かれリードを許した。

日本チームは、次第にあせりが見えはじめ、大雨に誘われてエキサイト、乱戦模様になった。

後半25分、GK本田からノーマークの野田に絶好のパスが渡り、単身速攻の型がなったところ、後から二人にタックルされた。審判員はこの二人にすかさず退場を命じ、しかも7MTが与えられるという絶好のチャンスをつかんだのが木野が失敗してしまった。7MTはこの試合両チームに三本づつあったのだが何れもノーゴールという始末である。

結局、相手の荒い反則で得た好機（3回の退場）を1回も活かせなかったことと32シュートで3点というシュートの非力が敗因になったわけだが、相手GKの精かん無比のプレーにしてやられたともいえる。平岡がつき指、井上が発熱で欠場。（勝）

▼第3日（遠征第9戦、6月8日、フロノスカ体育館）

全日本 25（12−10、13−11）21 トラクトール・ブラショフ

【日本】		得
GK	本田	0
GK	下里	0
FP	竹野	3
FP	近藤	3
FP	飯田	4
FP	近森	4
FP	有永	3
FP	木野	4
FP	東	2
FP	中井	1
FP	野田	1
FP	藤中	0
7MT	（0）	25

（評）トラクトールは外国チームにはめずらしく日本チームよりも平均身長が低く、技術的にもあまりみるべきものはなかった。

昨日の雨中戦でグランドが荒れ会場が急に体育館（35m×20m）に変わり、そのため朝から2度のパス移動でコンディションはあまりよくない。

まず防禦を固め、相手が小さいので飯田、有永にパラバンシュートを狙わした。たえず先行して試合は進んだが守りの詰めとバックスーGKの連けいが悪く、サウスポーの選手の単発シュートに簡単にゴールを割られた。今日までの試合で最低のディフェンスであった。攻撃もあと一息コンビにスピードと変化がなく、好・不調の差がはっきりしすぎ精彩を欠いた。飯田、有永、木野、近藤の強引なシュートの成功が勝因。

※

なお、第2試合で今日まで全勝のスパルターク・ブタペスト（ハンガリー）がボインツァに敗れたため、両者と日本の3チームが2勝1敗の同率となり、得失点差で日本の優勝が決まる。（村田）

▽日本チーム以外の大会記録

スパルターク 20−18 トラクトール

ボインツァ 18−8 トラクトール

ボインツァ 21−18 スパルターク

【順位】①日本②ボインツァ③スパルターク④トラクトール

（注）第10戦以後は次号



荒川監督・井上・谷藤ら選手14人

～日体大・韓国遠征メンバー～

全日本学連と代表校・日体大ではこのほど韓国遠征メンバー19人を次のように発表した。それによると団長には日体大学長・栗本義彦氏（日本協会顧問）が推され、監督は日体大部長・荒川清美氏（日本協会理事）。役員として関東学連理事長・田中秀夫氏が随行する。北川勇喜コーチ以下選手は井上・谷藤・斎藤ら全日本強化選手を中心に関東学生春季リーグ、選考試合などで活躍した主力14人が参加する。

○……日体大韓国遠征選手団……○

団　長	栗本　義彦	（日体大学長）	
監　督	荒川　清美	（日体大部長・日本協会理事）	
コーチ	北川　勇喜	（日体大監督）	
主　務	木野　明	（4年・明石高）	
選　手(主) FP	井上　亮一	（4年・明石高）	174cm
	谷藤　勝美	（4年・盛岡商）	170
	大川　洋司	（4年・麻生高）	168
	笠原　利宏	（4年・函館中部高）	170
	塩崎　信治	（4年・新居浜工）	174
	寺田　嘉一	（4年・静岡東高）	174
	斉藤　光男	（3年・富岡高）	182
	亀谷　正	（3年・大分商）	175
	安達　修三	（3年・大分東高）	170
	池田　信男	（3年・国学院栃木高）	184
	氷海　正行	（2年・明星高）	180
	松原　光三	（2年・熊本市高）	180
GK	海江田　弘	（4年・鹿児島工）	171
	大村　久	（3年・塩山商）	178
視察員	田中　秀夫	（関東学連理事長）	

ソウルなどで5試合
7月11日に出発

6年ぶりに復活した3度目の日韓学生交流は、次頁詳報のとおり日本代表として関東の覇者・日体大が決まり、7月11日午後5時羽田を発ち韓国へ向かうことになった。

韓国協会からの連絡では、試合は7月12日から18日まで7日間に5試合が組まれ、12、13日がソウル市、15日が地方都市、17、18日が再びソウル市の予定となっている。対戦チームの詳細については6月25日現在未定だが、全試合とも学生チームになるハズだ。

日韓学生交流は昭和36年の日体大訪韓、38年の韓国学生来日についで今回が3度目。日本の大学チームが渡訪するのは15年に早慶両大学が滞同遠征しているのを加えると3度目になる。

日体大にとっては36年についでの遠征だが、韓国ハンドボール界の指導的立ち場にある人たちはほとんど日体の主力として戦前の関東学生リーグで活躍、それだけに同校の訪問はとりわけ意義深いものがあろう。

今シーズンの日体大は、昨年全日本学生チャンピオンとなった時のメンバーから高橋、早川らを卒業させたうえ、ポイントゲッター藤中と好守のGK本田を全日本ナショナル（滞欧中）に送りこんだため、かなり戦力がマイナスになるのでは、といった不安もあったのだが、厚い選手層と豊富な練習量にモノを云わせ激戦の関東学生で全勝を飾っており全日本学生界を代表するにふさわしい攻守を誇っている。

荒川監督はじめ選手たちも、この遠征に期するところがあるようで、親善が第一義とはいえ、目標は「もちろん全勝」。

伝統の速攻に加えてコンビネーションプレーの完成にも力を入れており、4年生の教育実習が終わった6月22日から母校のコートで充分な練習をつんでいる。

韓国ハンドボール界の実力は急速に引きあげられているとみられ東西1部校上位の力は備えているだろう。

昨夏、下関中央工（山口、全日本高校優勝校）が訪韓した時、ソウルでの会場にあてられた奨忠体育館のコートはやや狭く、そのため同校は試合展開にとまどったというが、今回もその体育館が使用されるようだと、攻撃面積が広く左右に多彩なプレーをみせる日体大の戦法は割り引きされる面も出て来よう。

アジアの盟友として強力な布陣を確立しつつある韓国学生界との交流再開を心から喜ぶとともに、力いっぱいの好試合が展開されることを大いに期待するものだ。

なお来年以後の交流について具体的な打ち合せと今後の構想などを話しあうため、田中秀夫氏（関東学連理事長）が同行するが、その成果にも注目したい。

【写真は前列左から中村、安達、大川、笠原、北川コーチ、海江田、谷藤、塩崎、後列左から寺田、池田、氷海、大村、斎藤、松原、井上、亀谷の各選手】

日体大、関大と中京大破り代表に

全日本学連 韓国遠征校選考試合

韓国に遠征する全日本学生代表校選考試合は、6月1日東京・駒沢屋内球技場に、関東・日体大、東海・中京大、関西・関西大と春の優勝校が集まり、リーグ戦で行われた。

その結果、ともに中京大から勝ち星をあげた日体大と関西大が最終試合で決勝を争い、関大がうまく自分のペースで試合を運び接戦となったが、地力に優る日体大は前半終了まぎわに得たリードを活かして制勝、晴れの代表に決まつた。日体大は7月11日から1週間韓国2都市で韓国の学生チームと5試合を行う予定（写真は日体大―関西大戦から）



関西大（関西）19（9―5　10―6）11 中京（東海）

得	【関大】		【中京】	得
0	和田	GK	有川	0
0	入江	GK	戸田	0
4	馬着	FP	鈴木	4
0	中辻	FP	吉田	2
4	許	FP	杉本	1
5	松田	FP	望月	2
2	西脇	FP	足立	1
2	伊藤	FP	三輪	0
0	小島	FP	杉山	0
0	竹内	FP	笹野	0
2	宮松	FP	高良	0
0	安原	FP	平野	1
19	（1）	7MT	（1）	11

（審・藤原　田中）

○……前半20分まで一進一退の展開となった。関大は5―5から松田、許の巧技で優位に立ち、後半いちどは2点差にまで詰められたが、終盤再びセットからの変化で加点、鈴木、吉田らで懸命の反撃を試みる中京大をかわした。

日体（関東）20（10―1　10―3）4 中京

得	【日体】		【中京】	得
0	海江田	GK	有川	0
0	大村	GK	戸田	0
5	谷藤	FP	鈴木	1
1	大川	FP	吉田	1
4	笠原	FP	杉本	0
1	塩崎	FP	望月	0
2	斎藤	FP	足立	1
0	安達	FP	三輪	0
0	亀谷	FP	杉山	0
2	池田	FP	笹野	0
2	氷海	FP	高良	0
3	松原	FP	平野	1
20	（1）	7MT	（0）	4

（審・佐野　大塚）

○……小柄な中京FP陣はスピードのある小きざみなパスワークで日体ディフェンスに挑んだが効果がなかつた。日体は立ちあがりから豪快な速攻で10点を連取、前半で大勢を決めた。

日体 14（10―6　4―4）10 関西大

得	【日体】		【関大】	得
0	海江田	GK	和田	0
0	大村	GK	入江	0
2	谷藤	FP	馬着	0
2	大川	FP	中辻	0
1	笠原	FP	許	3
1	塩崎	FP	松田	2
5	斎藤	FP	西脇	3
0	安達	FP	伊藤	0
1	亀谷	FP	小島	0
0	池田	FP	竹内	0
0	氷海	FP	宮松	2
2	松原	FP	安原	0
14	（2）	7MT	（1）	10

（審・安藤　佐野）

○……代表の座をかけての一戦。日体は立ちあがりから積極的に攻め斎藤のロングシュートなどで3―1と先制関大も5分、6分松田が連続ゲット、タイとした。

日体大はこのあと斎藤の2得点で主導権を保ったが、関大のゆっくりとしたペースにはまり、なかなか点差を引きはなすことが出来なかった。

関西大は、長身揃いの日体ディフェンスに対して中央突破を狙わずサイドにボールを配して反撃、21分には5―7とせまった。

○……日体大は前半、終了まぎわ相手のわずかな乱れをついて3点を加え、どうにか余裕を持つことが出来た。

後半になって、関大は3分西脇、6分許の得点で、再び2点差としたが、そのあと約10分間無得点に終ったのが、結果的には敗戦へつながった。

○……日体大は、セットからの変化攻撃を再三試み、得点機をつかんだのだが、シュートに失敗して後半は20分までに2得点という不調、前半のリードがなければ危いところであった。

関大としては、つねに先手をとられ、追いこんでもリードするまでにいかなかったのが敗因であろう。しかし、久しぶりに関西代表が、関東代表に対して互角の力を示したことは喜ばしい。今シーズン下半期の活躍に注目したい。

日体大はこれで韓国遠征の代表権を掌中にしたわけだが、同校の訪韓は昭和36年10月につづき2度目である。

全日本学生界の代表として親善の実を多いにあげて来て欲しい。

田中氏が理事長を代行

全日本学連役員会

全日本学連の第2回総合役員会は6月1日、東京代々木の体協会議室で行われた。

懸案の全日本学連の規約改正については、関東学連が中心となって東西対抗（9月7日・名古屋）の時までに改正案をつくることを再確認した。

また、安藤理事長が、日本協会審判部長（常務理事）に専念するため辞意を表明。役員会も一応これを了承して、新規約発効まで関東学連・田中秀夫理事長が代行することになった。

7月11日からの韓国遠征校に今後の交流打合せで学連代表1名を随行させることとなり田中氏に決まった。

なお、今後韓国遠征などを行う場合、単独校とするか選抜とするか研究することになった。

このほか、11月26日からの全日本学生選手権を関東学連主管により全試合室内で行うことを承認した。

全日本審判員研修会報告

安藤純光
（日本協会常務理事・審判部長）

昭和44年度全日本大会審判員研修会は、本年度の全日本大会審判員107名の参加を得て、さる5月23日、24日、25日の3日間にわたって、オリンピック記念青少年総合センターおよび駒沢オリンピック記念公園会議室、第一球技場において開催されました。

この研修会は、昨年度にひきつづいて2回目の開催であります。前回は各方面からその成果について好評を得ました。今回はさらに大きな成果が期待されましたが、種々の事情により、充分な準備と計画をする期間もなく参加の諸氏にもいろいろと御不便をおかけしたことと存じます。さらに最終日の25日には雨天となったために、研修会の日程を大幅に変更しなければならないという障害がありました。

しかしながら、この研修会の目的である「競技規則の解釈の統一と審判技術の向上」とくに複審制という新らしい大きな問題についても実技および研修会議において討議され、初期の目的を達することができたと思います。

今回の研修会は、今年より実施することになった「複審制の問題」に焦点をしぼって研修することにしました。したがって研修会のテーマ（分科会・全体会議）も「複審制に関する諸問題」という共通のテーマで行なわれ、各地での体験から問題点が提起されました。

以下44年度全日本審判員研修会の内容と成果について報告致します。

※

第一日　研修会にさきだって13時より開会式が行なわれた。

○日本ハンドボール協会会長田村正衛氏あいさつ（要旨）

ハンドボール競技のみならず、スポーツにおける審判員の果すべき役割は非常に大きいことは、あらためて云うまでもなく皆様よく御存知のところであります。ヨーロッパではスタープレイヤーよりも誰れがその競技の審判をしたかということの方が重要視されているとのことであります。審判によってその競技の勝敗が左右されることがあります。どうか正しい、フェアーな審判をしていただきたい。そのためには、皆さん自身、審判員自からがスポーツマンでなければならないし、紳士でなければならないと思います。

新らしい制度の複審制の問題もあると思います。どうかこの機会に熱心に研修されて、立派な審判技術を身につけていただきたいと思います。目の前に世界選手権大会、ミュンヘンオリンピックもせまっております。よい選手を、よい技術をはぐくむのは競技における審判員であります。熱心に研修され、充分な成果をあげられるようお願い致します。

このあと部長より研修会全体にわたってオリエンティション、ひきつづき14時より分科会の参加者から複審制に関する問題点が提起され討議に入った（討議の大要）。

第1・第2合併分科会（座長箱崎敬吉、書記　山田仁止）

（1）7mスローの際のセンターレフェリー（以下C・Rと略す）とゴールレフェリー（以下G・Rと略す）の位置および笛について

◉G・Rが7mスローライン附近で監視するとゴールインに不明な点が生ずるし、ゴールラインに立って監視するとラインクロスの不明が生ずる。

○逆襲の確率が少なく、むしろ攻撃側へのリバウンドの方が多いから、G・Rはゴールラインからゴールインを監視し、C・Rが笛を吹く方がよいのではないか。

（2）相互の遠慮からくるミスを防ぐためにはどうすればよいか

◉C・Rがアドバンテージを見ている場合にG・Rが笛を吹いてしまう場合がある（逆の場合もある）。

◉退場のケースであるのにゆずり合ってフリースローにしてしまう例が多く見られる。

○2人のレフェリーの審判技術が高く、同等であればこのような問題も少ないが、地方では同等の能力をもったレフェリーを得ることに困難さがある。

○2人がゼスチュアーで判定を確認することが望ましい。

○同時に笛が吹かれた場合、C・Rよりややおくれて指示し確認した方がよい。

○2人のレフェリーに方向指示や判定の違いが生じた場合には、レフェリー間で話合って解決し、その結果をプレイヤーに伝達納得させてほしい。

▼第3分科会（座長　稲石三二　書記　山田進）

「複審制に関する規模」を中心に討議が行なわれた。

（1）コーナースローの笛は、どちらのレフェリーが吹くのか。

○室内で観衆が多いときなどC・Rの笛では聞えないことがあるのでG・Rが吹くようにした方がよいのではないか。

（2）C・RとG・Rの判定について、とくにホールデングあるいはプッシングとチャージングの判定について。

○G・Rは笛を少し遅らせて吹くようにしてC・Rの判定を採用するようにするが、両者が話合をする場合もあってよいのではないか。この場合には笛で再開する。

（3）レフェリーの動きについて

○C・Rはあまり深く入らない方がよい。

（4）主将の抗議について。

○原則として判定をしたレフェリーに対して抗議をするが、時間のないときまたは遠い場合には、近くにいるレフェリーに対して行なう。

（5）「注意」を如何にしてプレイヤーに知らせるか。

○G・Rの「注意」はプレイヤーにわかりにくい。

▼第4分科会（座長　清水正　書記　中西敬一）

座長から先に行なわれた実業団選手権大会の際の複審制審判につ

いて報告が行なわれ、次いで各地区からの問題点が出されたが、次の2点にしぼって討議が行なわれた。

（1）判定の相違・方法について

○チャージング・プッシングなどについては技術的問題であるのでレフェリー相互の研究と経験を多く積むようにしなければならないであろう。

○固定したペアーを組むことによってスムーズなレフェリーができる。固定できない場合には事前に充分に打合せを行なうことが必要である。

○方向の指示は両レフェリーとも行なう。

（2）レフェリーの動き方、位置について。

○C・Rがあまり深追いすると逆襲に間に合わないことがしばしばあるので、やや後方に位置する方がよい。

○C・RからG・Rにかわる場合、如何なる場合でもゴールライン近くに行くことを念頭におき、速攻の際プレイヤーの邪魔にならぬようにコートの外に出て走ることも考える。

○C・Rは横の動きをもっと多くし、コート中央に位置したときに逆襲があった場合には最短距離を通ってゴールラインに向って走るようにする。

○G・Rの目の前でシューリがなされるようとした場合、サイドライン方向にややさがって身体動作、ゴールラインを確実に見えるように位置する。

以上が各分科会において討議された複審制に関する問題点の大要であった。

第二日　各分科会がそれぞれ1コートを担当して、10時より15時まで駒沢球技場で実技研修（レフェリーおよび記録）を行なった。ついで16時30分より日本体育大学の教室を借用して全体会議を行なった。第1日の分科会において討議された複審制の問題について全体討議に入り、次の結果を得た。

（全体会議）（議長団　嶋田新太郎、山田計、藤田八郎）

（1）レフェリー相互の遠慮からくるミスを防ぐにはどうすればよいか。

○C・Rがアドバンテージを見ながらゲームを監視しているときG・Rが笛を吹いてしまう場合がある（反対の場合もある）

◎G・Rがすこし間をおいて（おくれて）吹くようにする。

○2人が判定の確認することが望ましい。

○同時に笛が吹かれた場合、C・Rが早く方向を指示し、G・Rはおくれて指示を確認する。

○2人のレフェリーに方向指示の違いが生じたら、レフェリー同志の話し合いでその結果をプレイヤーに伝達納得させるようにする。

◎実際には、目とか手などの動作で合図しあい、できるだけ短時間で解決する。

（2）レフェリーの位置のとり方

○C・Rの横の動きをもっと多くし、コート中央に位置したとき、逆襲があったら最短距離を通ってゴールラインに向って帰るように留意する。

○G・Rの目前でシュートがなされようとした場合には（見にくい）サイドライン方向にややさがって、確実に見えるように位置する。

（3）コーナースローの笛

○規範どおりC・Rが吹く（体育館で観衆がわいて聞えないような場合には、G・Rが吹いてもさしつかえない）。

（4）7ｍスローの際のレフェリーの位置。

○規範にしたがってG・Rが吹く。

（5）レフェリーと記録との連絡確認について。

○規則にある「注意」「とそうでない注意（退場の対象にならない）」がある。規則にある「注意」をする場合には笛を吹いて中断して注意をし記録にとどめる。（笛で再開）後者はプレイヤーに近づいて注意をする。

（6）7ｍスローとフリースローの笛。

○7ｍラインを指し大きな声で「7ｍスロー」とコールする（従来どおり行ないジェスチュアなどを明確にする）。

（7）主将の抗議および質問について

○原則として判定をしたレフェリーに対して行なう。時間のないとき、判定をしたレフェリーに遠いときには近くのレフェリーに行なう。

（8）競技開始時および終了時のレフェリーの体型終了時のレフェリーの位置について

○開始時と終了時には、同じ位置に立ち、開始および終了の宣言は交代して行なう。記録席と本部席が同じ側にある場合には2人とも同じ側でよい。

以上を確認した。

この他、複審制以外の問題として次のような問題が提起された。

（1）イ、フリースローのときボール保持者がパスのあと腕をひろげて防禦側に近ずく動作にいって（第一分科会）

（審判部解答）身体接触がない限り反則とはならない。

ロ、このとき手を握って攻撃や防禦をした場合にはどうか。

（審判部解答）◎明らかに手を握って攻撃や防禦をした場合には反則である。

（理由）ハンドボール競技は個々の連けいプレイであるから、肩車や手をつなぐなどはハンドボールらしさを失なう（反スポーツマンシップ）ので注意し反則をとる

（2）ユニフォームナンバーについて（第一）

○20㎝×20㎝は大きすぎないか

○前番号をつけないチームに対して、「出場を認めない」ぐらいに規則化したらどうか。（審判部において研究する）

（3）7ｍスローラインが消えた場合、指などでひくが、ゴールライン附近からではラインクロスが見にくい（ゴールも同時に見るため）ので何等かの方法を考える必要があるのではないか。（第四）

（4）審判の体力測定などの規準をもうけてはどうか（敏捷性、走力、持久力、決断力などについて）（第四）

（5）協会で同音の笛を統一してはどうか（第四）

（審判部解答）現在の時点では協会で笛を指定することは困難であるので、ペアで笛の統一（同じ音色のものに）をはかってもらいたい。

第三日　雨天のため日程を変更し、9時よりセンターで全体会議を行なった。研修会のあり方について討議が行なわれたが、内容については後述のアンケートにもあ

るので省略する。

以上で11時に閉会、解散した。

最後に参加された方々から提出していただいたアンケートを中心に今回の研修会を反省してみたいと思います。全体的な感じとしては、昨年にくらべて低調であったことは研修会運営の責任者として強く反省しているところであります。はじめにも述べましたように今回は準備の点でも不充分であり加えて天候にわざわいされて計画通りの日程を消化することができず、また会場その他の点で不備な点が外く参加の皆様に多くの御迷惑をおかけし、これが原因となって研修会全体が低調なムードのうちに終ったと考えられます。これらのことは以下に述べますように、アンケートの集計の結果にも強くあらわれています。

（1）研修会の開催についての賛否について。

賛成26％、反対22％、賛成された方が多いのですが、しかし賛成の中に「解釈の統一ができる」「審判技術の向上になる」などの意見の他に、「内容にとぼしい」とか「実技をもっとみっちりやってお互に批評するように」などの意見がありました。

これにも増して注目されるのは、22％の研修会開催の反対の意見であります。この意見は、「内容にとぼしい」ということと「費用の支出をせよ（交通費）」ということとかみあっているようであります。この反対の意見は、現状では反対であるが、内容を充実することによって賛成にかわり得るものが多いようでありました。きびしい批判であると感じています。

（2）開催の時期について

今回と同じ時期（5月中旬～下旬）40％、3月下旬20％で「丁度試験の時期で出席しやすいから今回の時期でよい」との意見が多く見られましたが、「新年度は4月からはじまるのだから、その前の3月下旬に行なうべきである」という意見もありました。

（3）研修会の運営、方法について。

今回の方法でよい…20％。もっと方法を考えるべきだ…52％。「今回の方法でよい」という意見20％に対して「もっと方法を考えて充実したものにすべきである」という意見が過半数に達し、「少なくとも今回の研修会以上の内容豊富なものにすべきである」「全員が実技研修できるようにすべきである」「模範レフェリーを見たい」「東京・大阪の2会場にわけて開催してはどうか（出席しやすい）」「各ブロック毎に開催してはどうか」「旅費を支出せよ」「審判部はもっと強力な態度で推進せよ」などの意見がありました。

これらの御意見に対して若干の私見を述べさせていただきます。

「参加者の旅費を支給せよ」という御意見は前年度にもありました。しかし現在の協会の財政状態では、現在がせい一杯であります　ここから派生的に出て来る問題として、会場を東京だけでなく他の地方でも開催してはという意見も多く見られました。しかしこの研修会は、一会場に全員が集合して研修するというところに一つの意義があるわけでありますので、さらに御理解をいただきたいと存じます。会場の問題は必ずしも東京と限っているわけではありませんので、適当な場所があれば、そこで開催することができます。ブロック毎の開催はとにかくとしても東京、大阪の二会場開催など他の問題とともに研究課題としたいと思います。

開催期間については、年度はじめにという意見も、ごもっともであります。しかしより多くの人が参加しやすい時期に開催すべきであると思います。

研修会の運営方法については、ご意見にありますことはもちろん今後充分に検討されなければならないものと思います。名実ともに立派な内容にするために。なお研修会のために御協力いただいた関東学生連盟の学生諸君および役員の方々に厚く御礼を申しあげます。

昭和44年度全日本大会審判員研修会参加者名簿（順不同）

嶋田新太郎	平田　幸夫	門前　和	中井　泰彦	永井　勝雄	碇　一夫
中西　敬一	荒谷　拓三	若山　博	川口　譲	砂長　誠	望月伸三郎
山田　進	近藤　正行	村井　輝郎	佐々木茂喜	梅野　克雄	近藤　金博
箱崎　敬吉	林　藤吉	石切山稔治	佐々木敏雄	金沢　淑郎	小林　進
藤田　信義	辻　一義	浅野　克彦	千野　恒夫	奥村　方志	片山　彰一
柳井　文治	片瀬喜代次	金原　至	柳沢　民弥	間瀬　和義	島田　秀四
稲石　三二	鈴木　城	桶家　寛	加藤　雅之	鈴木　四郎	細井　操
山田　計	斎藤　実	徳前　啓人	岡村　久	赤松　英男	佐分　正典
清水　正	後藤　敏男	高橋　健夫	星井　直	西川　勤也	宍戸　幸一
山田　仁止	柏崎　茂	永山　茂	岡田　重博	河野　好央	藤原　豊
藤田　八郎	上田喜代治	黒沢　博美	吉川　充滋	寺村　新悦	清水　剛
中沢　重夫	富樫　栄	住尾　勉	石野　誠	北川　裕之	岡田　豊夫
佐野　和夫	渋谷　行康	田中　秀夫	青木　崇	森　豊夫	丸岡　一清
岡前　義春	大橋　昭重	遠藤　健次	岡村　昭二	小西　博喜	由利　弘
大塚　文雄	狩野　幸介	丸口　哲美	今村　孝一	雨海左武郎	岡井　幸由
藤原　侑	熊田　栄一	河本　武夫	野村　良水	山内　孝雄	小松　進
北川　勇喜	関川　正道	日野　博	小田　英俊	村上　俊一	豊島　康男
安藤　純光	斎藤　和夫	前田　吉弘	槇　敏夫	岡本　克彰	以上107名

球界パトロール

久留米の超OBチーム大活躍…市大会で準優勝飾る

▽……〝OBをグランドに呼びもどそう〟――このところ各所で聞かれる言葉だ。

愛知のクラブリーグや、大阪の友の会などは、ともすれば散り々々になり勝ちなOBを結集させるのに、このうえない成果をあげているようだが、全般にこれはといった対策は打ち出されていないのが現況である。

▽……久留米市ハンドボール協会では、このほど市体育協会に加盟したのを機に、市選手権を開き、男子8、女子2チームを集めて高校女子界の名門・明善高グランドで熱戦をくりひろげたが、話題をさらったのは「全久留米超OB会」の活躍だった。

メンバーは、いずれも久留米市の指導者。平均年令39才という文字どおりのオールド・ボーイたち。

全久留米超OB会

古賀	信男(51)	B・S勤務
荒木	英之(48)	明善高教諭
原	要(48)	〃
長野農夫男	(37)	陸上自衛隊幹部候補生学校
本室	直彦(31)	〃
田中	治夫(31)	信愛女学院教諭
白根祐三郎	(27)	明善高コーチ

（ ）内は年令

▽……最年長の古賀さんはおそらく国内でも最高年令のクラスに入るだろう。

昨年12月に日本体育協会が報告した〝競技スポーツ人口調査〟によれば51才以上のハンドボール登録競技者は17名となっている（体協時報44年2月号）。荒木さんは、明善高の監督を永くつとめ、昭和30年には同校を全国優勝させた手腕の持ち主だ。長野さんとともに、現在は福岡協会役員として、その運営にもたずさわっている。

▽……どの選手をとってみても〝ハンドボールの虫〟の一言につきる。しかも風薫る5月とはいえ、この年令で一日3試合を行ったというのだから驚いた。その気力やまさに激賞もの。

長野さんによれば『びっこをひきながらの奮斗は、随所に超ファインプレー、珍プレーを折りまぜファイトはもとより、試合内容も充実…』ということで決勝戦まで進出。藤山食堂チームに惜敗して優勝こそ逃がしたが堂々と準優勝教へ子たちの拍手につつまれて意気ようようたるものであった。

▽……高校、中学あるいはスポーツ少年団えの侵透といった面は、近年急速にのびているのだが〝OBの確保〟は、球界のかかえる課題の一つである。組織が固められているハズの大学OBクラブも、最近は定期戦などの前座でお茶をにごしているところが多い。

「全久留米超OB奮戦」のニュースはまだまだ各地に腕を撫す〝古強者〟が多いことを伝えてくれている……。

はっきりしない球技8ケ国説

オリンピック　事実なら影響は大

IOC（国際オリンピック委員会）が、6月6日からワルシャワで開いた第68回総会の席上、ミュンヘンオリンピック（一九七二年）から、ボールゲームの参ケ国数を16ケ国から8ケ国に減らす決定をした―というニュースが流れ、ハンドボール界をはじめ、内外各スポーツ界に少からぬ衝撃を与えているが、今のところこのニュースには不明確な点が多い。

総会に出席した東竜太郎IOC名誉委員の帰国記者会見（6月12日・羽田）でも「16から8チームにしぼることになった。いつからということははっきりせず、〝最終的に〟という表現だったが……」（朝日）「縮少すると伝えられたようだがこれに関しては審議も決定もなかった」（読売）「バスケットボールに女子が採用され、男子8、女子8の編成になり、他の球技も最終的に参加数を8チームにしぼる方向がうちだされたが、バスケットをふくみ、いつから適用されるかはっきりしない」（東京）「話題にはなったが決議はされていない。ミュンヘン大会以後の問題になろう。」（日刊スポーツ）とあいまいで、6月22日に帰国した清川正二IOC委員も「ブランデージ会長が強く要望していたが来年の総会ではっきり決まると思う」といっており次のIOC総会（来年・アムステルダム）までこの問題はもやもやしそうである。

オリンピックの規模縮少は数年前からの懸案ではあるが、だからといってボールゲームの参ケ国数を一挙にこれまでの半数に減らしてしまうことは各球技界に及ぼす影響が大で、特に36年ぶりにオリンピック参加というチャンスをつかんだハンドボール界には、いっそうこの問題の投じる波紋は大きいものがある。

日本協会では、IHF（国際ハンドボール連盟）からの公式連絡があるまで静観の態度だが、国際担当の宮崎常務理事は『この決定が事実なら大問題だ。ハンドボールに限らず当然各IF（国際競技連盟）が動き出すことだろう。将来はその方向へ向かってもミュンヘンは16ケ国で行って欲しいものだ』と云っている。

また体協競技力向上委員会前田委員長（バレーボール）は『3月ブランデージIOC会長からもらった手紙に球技を8チームにしたいという話があった。その場合男子8、女子8チームということだった。しかし、もしこれが正式決定だとするとオリンピックに出られない団体がたくさん出て日本としては非常に困る。特に底辺拡大の観点からオリンピックに出られないことは大きなマイナスで、今後は世界選手権などでよほどがんばらなければいけないだろう』（共同通信）という談話を述べている。

IHFでは、昨年9月アムステルダムで開いた総会席上、ミュンヘンオリンピックは16ケ国（男）で行うと決めており、そのうちの8ケ国を、来春フランスで開く第7回世界男子7人制選手権の決勝リーグ進出国（ベストエイト）とすることも申し合わせている。

今回のIOCの決定が実施されるとすれば、16ケ国出場を前提としたIHFのこの決議に対しても当然、修正が加えられるものと消息筋はみている。

なお、オリンピック憲章に定められた競技のうちボールゲームはハンドボールのほかサッカー、バスケットボール、ホッケー、バレーボール、水球の計6競技である

女子の採用も不明確

IOC総会を前に、IF（国際競技連盟）では、5月31日から6月2日までローザンヌで総会を開き、IOCに対して女子ハンドボール、女子自転車のオリンピック参加を認めるべきであるなどの要望をまとめ、6月3日のIOCとの合同会議に提出したが、ブランデージIOC会長はこうした種目の増加については否定的な考えであることを明らかにした。

女子ハンドボールのミュンヘンでの実施は、昨年10月メキシコシティで開かれたIOC総会でも保留事項になっており、今回も採否いずれもはっきりした線は打ち出されなかったようである。

ヨーロッパの一部には、男女各8ケ国づつでミュンヘンのハンドボールは行われるという噂も流れているようだが、その裏付けとなるべき情報は今のところ日本協会ではつかんでいない。むしろ現段階では女子の採用は難しいというみかたの方が強い。

世界女子選手権　IHFからの連絡待ち

本誌前号で報じた世界女子7人制選手権の年内開催説は、その後になってもIHF（国際ハンドボール連盟）から日本協会には公式の連絡が入っていないが、ルーマニア滞在中の全日本男子・村田監督から田村会長に寄せられた私信では「ヨーロッパ各国では、年内開催が決まったといっている」旨伝えて来ており、また同氏から編集部へも「西ドイツの女子コーチ・トルカ氏（昭和42年に来日）に会ったところ、11月か12月にソビエトで行うことになったと話していた」と連絡して来ている。

渡辺副会長（IHF担当）の話

まだIHFからは公式連絡がとどいていない。

4月30日までに開催希望国があればIHF宛届出るようにという通知が3月にあったのだが、ソビエトが重ねて開催を要望したことは考えられる。

日本が、出場するかどうかは正式の通知が来てから協議することになるだろう。

7月11日に全国自衛隊大会

日本協会では、自衛隊におけるハンドボール普及策として全国大会の開催を検討していたが、7月11日駒沢第2球技場に全国から12チームを集めて「第1回全国自衛隊選抜選手権」の開催を内定した

同大会は、はじめ全日本実連によって、全国自衛隊選手権として行われる予定だったが、準備期間がなく、選抜大会となったもの。

臨時常務理事会議事録

4月19日・(抜すい)

「世界選手権派遣基金」制定のため臨時招集。

一、「自主的な財源を確保し、海外遠征の際、代表選手の自己負担をなくしたい」と田村会長が提案主旨を説明、全員がこれに賛成。

一、実施に関しては、渡辺副会長が〃規程〃を次回に提出し、それにしたがって運用することに決定

一、アイスランド協会から、来春の世界選手権途次、同国に立ち寄って欲しいとの要望書が送られて来たが招待をうけるかどうかは後日に審議する。

一、韓国に遠征する学生代表チームに視察のため強化対策委員を1名同行させる件は全日本学連と強対委が話し合うことに決定。

一、タスマジャン杯団長に西敏郎副会長を決定(自費参加)

(注)、西副会長はその後、健康上の理由で辞退。

一、イ、今年の全日本総合選手権男子の日本協会推せんチームは3チームとし2月に発表した「43年度優秀チーム」(全立教、日体大、大崎電気)を当てる。

ロ、今大会から新発足の全日本教職員連盟から2チームの推せん出場を認める。

ハ、ブロック代表が棄権し、ワクが余った場合は例年どおり学連にその分を割りあてる。

月例常務理事会議事録

5月8日・(抜すい)

一、台湾のハンドボール活動の中心になっている宋、温、柳の3氏が今夏来日(自費)したい意向を持っている。

一、12月の全日本選抜選手権に関して。

男女6チーム総当り案が出されたが、今年は前年どおり男女各8チームによる準決勝・決勝リーグシステムを採る。改訂するならば昭和45年度からとする。

一、審判部から今年度中に「45年度競技規則書」を作成したいという要望。

一、スポーツ振興法による体協補助金60万円は前年通り全日本総合全日本選抜、全日本学生、全日本高校、全日本実業団、全日本教職員各選手権に10万円づつ割りあてる。

一、タスマジャン杯団長に決定していた西副会長は、当分の間病気療養のため辞退。後任は選任せず村田弘全日本監督に団長を代行させる。

一、IHF審判講習会(7月・スペイン)に山田計理事の派遣を確認。

一、昭和45年度の事業日程作成にあたって現行全日本各選手権の再検討を行うことになり、このための小委員会を編成することに決定委員の人選は6月中に行う。

一、全日本実業団連盟で、「日本女子リーグ(仮称)」開催の考えをもっていると渡辺副会長から発言

一、10月の長崎国体ハンドボール競技の主要役員を大会委員長＝若崎技術部長(常務理事)、同副委員長＝松村長崎協会理事長、競技委員長＝藤田(八)九州ブロック選出日本協会理事に決定。

紙面の都合でこの議事録(抜すい)は、本誌がすでにニュースとして報道しているものは割愛する場合があります。御了承下さい。(編集部)

西副会長の代行者

日本協会では6月13日の常務理事会で、西副会長の病気療養中の代行者を次のように決めた。

▽体協競技力向上委員会、宮崎常務理事▽選手強化対策委及び技術部、審判部統括、若崎常務理事

全日本総合の推せんチーム

日本協会では8月8日から13日まで岩手県盛岡市の県営グランドで行う第21回全日本総合選手権に各加盟団体から推せんされた男子チームを次のように発表した。

なお、日本協会推せんはすでに全立教(東京)、日体大(東京)大崎電気(埼玉)、の3チームと決められており、地方ブロック代表は7月1日までに日本協会へ報告されることになっている。女子は例年通り32チームまでに限り自由参加。

▼全日本学生連盟推せん(10チーム)

東北大(東北北海道・宮城)

中央大(関東・東京)

芝浦工大(関東・東京)

法政大(関東・東京)

明治大(関東・東京)

中京大(東海・愛知)

関西大(関西・大阪)

同志社大(関西・京都)

大阪経大(関西・大阪)

松山商大(中四国・愛媛)

▼全日本実業団連盟推せん(4チーム)

三景(東京)

日進商会(神奈川)

常盤工業(岐阜)

住友化学菊本(愛媛)

▼日本教職員連盟推せん(2チーム)

大阪イーグルス(大阪)

残り1チーム未定



高体連、20周年を迎う ④

今回は国体高校の部についてまずふれてみよう。

すでに述べたように、第二次大戦後の国内スポーツ界――とりわけハンドボール界にとって、昭和21年に発足した国体（国民体育大会）は、競技の普及、組織の確立などに大きな役割を果たした。

近年は、強化を急ぎ、好成績を望むがあまり、好ましくない傾向が出ているといわれる国体だが、当初は、そうした面が、地方スポーツ界の振興に多大な貢献を寄せたのである。

ハンドボール界は、昭和13～16年東京の大学を中心に、ようやく地方へその枝葉が伸びかけたところで戦火となり戦後、国体の開催でそれがうまく引きつがれた。もし、国体の発足があと二、三年でも遅れていたならば、既成の各スポーツが復興の態勢をしっかりととのえ、新種目ともいえるハンドボールが短時日に発展の道を歩むことは難しかったろう。

さて、高校チームにとって、炎天下の全日本高校選手権（インター・ハイスクール）と併せ、爽秋に展開される国体は大きな目標であった。特に昭和21年から4年間は全日本高校選手権がまだ始められていないこともあって、全力をこの大会に集中させていたといえる。

優勝校を眺めてみると（次頁）男女とも初期は大阪勢が圧倒的に強味を示した。

戦後、大阪を中心とした近畿勢の立ちあがりは早く、しかもたくましかった。一般、学生においてもこれは同じである。

勝者にみる〃つながり〃

大阪勢の中で出色の活躍をみせた男子の天王寺高、女子の春日丘高は、昭和25年に開始された全日本高校でも、その力を当然発揮するものと期待が集ったのだが、その宿望を遂に達することができなかった。不運である。

女子の場合はそれでも寝屋川高の抬頭によってトップゾーンの伝統は引きつがれたのだが、男子は有力チームを輩出するものの優勝校を生むまでにはいたっていない

高校界の消長は、不思議に〃地域〃単位、〃地区〃単位だ。

つまり、強者を出した所はつづいて優秀なチームが生まれ、激しい競りあいから、その地区全体のレベルがとび抜けるようになる。

男子で桜台高―中京高（商）―名城大附高、女子で稲沢高―半田高―名女商とつづけた愛知勢はなかでもこの特色が著しく、このほか明善高（福岡）―熊本市立高―菊池農（熊本）とつながった九州女子、古く世田谷工にスタートし神代高―明星高―中央大附高と流れる東京男子、さらに近年では和洋女高（秋田）―花巻南高（岩手）に実った東北女子の健斗などがその好例である。

一校だけが県内なり、ブロック内なりのタイトルを独占しつづけることは、その学校の努力はもちろん賞されてあまりあるが、高い立ち場からみれば、周囲の力にもうひとつ物足りなさを感じないわけにはいかぬ。

王者の交代があってこそはじめて前進がはかれ、なされるのであろう。

その意味で、国体初期における大阪勢の君臨は、日本高校界にとって最初の〃全国的な目標〃であり、特筆されるべきだろう。

国体勢でみせた大阪勢や岡山勢の活躍が、他地区の目ざす一つの〃レベル〃であり、その線に近づき、あるいは越すことが全国制覇への道となったのである。

強い郷土との結びつき

国体が、夏の全日本高校と球趣を異にしているのは、郷土の名誉にもつながっていることだろう。

しかもこの大会での成績は〃ハンドボール県〃としての印象の強弱にもなるのだ。

開催地と地元校の勝負の関連に特色があるのもそのためである。

地元校が優勝した例は男子が氷見高（富山・第13回）、徳山高（山口・第18回）の2回、女子も静岡城北高（第12回）、徳山高（山口・第18回）の2回。徳山高の男女制はは〃偉業〃だ。ちなみにこの年の徳山高の全日本高校での成績は、男子が準決勝、女子が準々決勝で敗退しているのだが、国体では男子が中京商、女子が静岡城北高とそれぞれ夏のチャンピオンチームを降して優勝を飾ったのである。

このほか、地元校が上位に進んだケースは男子で世田谷工（東京第4回2位）、清水商（静岡、第12回3位）、神代高（東京、第14回3位）、加納高（岐阜、第20回3位）、羽水高（福井、第21回3位）女子で金沢一女（石川、第2回3位）、福岡京都高（福岡、第3回3位）、瑞陵高（愛知、第5回3位）、熊本市立高（熊本、第15回2位）、井原高（岡山、第17回3位）、加納高（岐阜、第20回2位）浦和女高（埼玉、第22回3位）などがある。

これら各校の試合ぶりは地元ファンの大声援のうちに進められ、それが、その地々々におけるハンドボールの根下しになった例も少なくない。

昨年からいわゆる選抜―2校以上の混成チームの出場が認められるようになり、初年度で男子の優勝が全静岡、2位が兵庫選抜、女子では2位以下4位までが全静岡千葉選抜、全岩手によって占められたことは記憶に新しい。

このシステムによって、ますます地元との結びつきは深まることになるであろうが、球界にとっては、〃埋れた人材〃の発掘の機会

が増したわけだ。

まず国体で優勝……女子

昭和25年以後の国体優勝校のうち、全日本高校のタイトルを得ていないのは男子では済々黌高(熊本)、氷見高、鎌倉学園高(神奈川)、徳山高の4校あるが、女子は春日丘高(大阪)、徳山高(山口)、の2校だけ。春日丘高は国体では2回優勝を飾りながら、夏の王座に就けなかったのは、前述の大阪勢の不運のなかでも特にその感が強い。過去3回の優勝を得ながら全日本高校では宿願をなかなか果せなかった菊池農が、去年やっと大望を遂げたのは周知のとおりである。

女子で興味深いのは、全日本高校優勝の前に、まず国体のは権を握っている学校が多いことだ。

操山高(岡山一女)、稲沢高、熊本市立高、静岡城北高、半田高、菊池農がこのケースである。

国体での自信がはげみとなり、誇りとなって、夏への気力をいちだんとふるいたたせるのではあるまいか。

男子は、桜台高の快勝がここでも目につく。ダブルクラウン7回30年から3年間は完勝、全日本高校、国体各9回の優勝という輝かしい実績……。

なお、国体高校の部は全日本高校とはちがい、地域(ブロック)が予選母体になっており、それだけに出場への道はせまくけわしい。

36年(第16回・湯沢市)の男子だけは32県からの代表を認めているが、これは東京オリンピックでハンドボールの実施が有望視され若い人材の発掘となるべく多く、大きな舞台を踏むチャンスを与えようという狙いからであった。

〝高校総体〟の発足

ところで、全日本高校選手権は38年から全国高校総合体育大会という大きなワクの中で実施されるようになった。国体と同じように県単位の選手団が編成され、総合開会式は、大規模で華やかである。

運営面では、全競技にNHKが後援として加わり、ハンドボールの場合は、第1回からバックアップを受けている朝日新聞社と並ぶことになった。

ちなみに、全日本高校選手権の最初のTV中継(NHK)は、第16回大会(昭40・熊本市)の女子準々決勝・菊池農—加納高戦である。

日韓交流の再開なる

37年全日本高校の訪韓、38年韓国高校の来日と〝日韓交流〟は両国関係者の努力で交互招待が軌道へのったかに見えたのだが、39年から4年間中断してしまった。

39年は東京オリンピックの年にあたり、話しあいの段階までで具体的な動きをみずに流会したのだが、40年は2回目の訪韓として全日本高校選抜(男・女)の遠征準備が進められていた。しかし、政治上の諸問題で御破算となり、再開のメドがつかぬまま時日をすごした。40年に遠征が予定されたチームが、41年1月に沖縄転戦を行ったことは、すでに述べた。

昨年春になって、韓国体協の閔寛植会長が来日して、日韓の高校交流を日本の体協関係者に強く要望。それも、これまでのように各競技が個々に交歓するのではなく総合競技会形式ということであった。

この結果、8月に第1回大会として、ハンドボールなど7競技がソウルで開かれ、日本選手団が遠征した。

ハンドボールは、全日本高校選手権で初優勝の下関中央工(山口)が代表となり中村正樹校長を役員に槙敏夫監督、中川敏治主将ら選手13人(GK=山徳、西村、FP=中川、広井、今浦、吉田、川合酒井、古谷、鬼村、西島、皆本、中島)と高体連・山田計副部長が随行した。成績は1勝1敗(前号参照)

第2回大会は今夏、東京で開催される。韓国代表団が来日して

国際的には、オランダ協会が主宰して「国際高校大会」というのが、毎年開かれているが、参加国はつねにヨーロッパ、それもオランダ周辺の国に限られており、もちろん日本からはいちども参加したことがない。経費面など考えれば、当分、高校チームの欧州遠征などは望めず、となれば高校選手にとって、韓国との交流は一つの〝夢〟といえる。

台湾協会の動きが軌道にのれば近い将来は「アジア・ユース大会」の実現も有望といわれており、20年の年輪を重ねた高校ハンドボール界が、国際的事業に手を伸ばすのも遠いことではあるまい。【文責・編集部】

全日本高校・国体高校優勝校

	【男子】全日本	【男子】国体	【女子】全日本	【女子】国体
昭21	…………	豊中中学	…………	…………
22	…………	天王寺中学	…………	茨木中学
23	…………	天王寺	…………	春日丘
24	…………	天王寺	…………	岡山一女
25	足利	足利	操山	春日丘
26	桜台	桜台	倉敷青陵	倉敷青陵
27	桐生工	桜台	寝屋川	稲沢
28	桜台	桜台	稲沢	稲沢
29	桜台	済々黌	寝屋川	寝屋川
30	桜台	桜台	明善	明善
31	桜台	桜台	寝屋川	熊本市立
32	桜台	桜台	水海道二	静岡城北
33	清水商	氷見	寝屋川 熊本市立	水海道二
34	中京商	鎌倉学園	熊本市立	熊本市立
35	中京商	中京商	熊本市立	半田
36	中京商	兵庫工	半田	水海道二
37	桜台	桜台	静岡城北	菊池農蚕
38	桜台	徳山	静岡城北	徳山
39	明星	桜台	栃木女	静岡城北
40	桜台	桜台	静岡城北	菊池農
41	明星	明星	和田和洋	菊池農
42	明星	明星	花巻南	栃木女
43	下関中央工	全静岡	菊池農	菊池農

全日本高校選手権各県予選記録（上）

★ 太字は代表校
★ 6月18日までに報告分

九州

▽……福岡県

▼高校男子1回戦
田川工 11－8 宗像
小倉工 16－12 明善
筑紫中央 16－9 嘉穂農
若松 13－7 泰星
久留米工 19－9 西南
小倉西 21－10 東海
香椎 11－6 田川農
博多工 13－9 門司

▽同準々決勝
田川工 12－10 小倉工
若松 10－6 筑紫中央
久留米工 18－16 小倉西
博多工 26－13 香椎

▽同準決勝
博多工 12－11 久留米工
田川工 9－6 若松

▽同決勝
博多工 12－11 田川工

▼女子1回戦（1試合）
福岡女商 7－6 信愛

▽同準々決勝
筑紫女 13－0 福岡女商
古賀 12－3 室見丘
筑紫中央 20－1 南筑
明善 18－1 福岡女

▽同準決勝
筑紫女 7－4 古賀
明善 7－4 筑紫中央

▽同決勝
筑紫女 6－4 明善

▽……大分県

▼男子決勝リーグ
鶴崎工 23－1 大分商
大分商 15－6 国東
鶴崎工 18－8 大分東
鶴崎工 19－6 国東
大分東 12－6 大分商
大分東 17－6 国東
【順位】①鶴崎工②大分東③大分商

▼女子予選リーグA組
玖珠 27－2 野津原
大分商 5－3 野津原
玖珠 11－1 大分商

▽同B組
大分東 28－0 中津北
青山 14－5 中津北
大分東 17－4 青山

▽同決勝
大分東 10－2 玖珠

▽……佐賀県（女子のみ）

▼女子予選リーグA組
神埼農 15－2 武雄女
嬉野 24－2 多久女
神埼農 12－4 多久女
武尾女 8－6 嬉野
神埼農 21－2 嬉野
武雄女 11－6 多久女

▽同B組
佐賀東 29－0 伊万里学園
清和 25－1 伊万里学園
清和 15－10 佐賀東

▽同決勝リーグ
神埼農 20－2 佐賀東
武尾女 7－6 清和
佐賀東 9－7 武尾女
神埼農 11－2 清和
神埼農×武尾女、佐賀東×清和戦は予選リーグの記録を適用
【順位】①神埼農。2位以下は順位決定リーグを行ない②清和③佐賀東④武尾女

四国

▽……愛媛県

▼男子1回戦
新居浜商 26－12 松山商
松山北中島 19－11 今治西
松山東 11－8 新居浜東
今治工 17－11 新田

▽同準々決勝
新居浜工 17－7 新居浜商
松山工 15－12 松山北中島
松山東 23－12 今治工
松山北 19－4 松山商

▽同準決勝
新居浜工 11－10 松山工
松山東 10－8 松山北

▽同決勝
新居浜工 22－9 松山東

▼女子1回戦（2試合）
東温 8－4 明徳
新居浜西（家） 8－1 大洲農

▽同準々決勝
新居浜商 15－1 東温
土居 8－2 今治西
今治南 8－6 新居浜東
松山商 7－4 新居浜西（家）

▽同準決勝
新居浜商 11－2 土居
松山商 21－10 今治南

▽同決勝
新居浜商 13－4 松山商

▽……香川県

▼男子1回戦（3試合）
三本松 22－1 高松商
坂出工 13－5 多渡津水産
多渡津水産 12－4 土庄

▽同準々決勝
三本松 11－10 高松工芸
丸亀 20－4 高松東
多渡津工 14－9 高松南
坂出工 7－6 高松一

▽同準決勝
坂出工 6－5 多渡津工
三本松 10－8 丸亀

▽同決勝
三本松 9－5 坂出工

▼女子決勝リーグ
三本松 6－3 高松女商
観音寺商 12－3 高松南
三本松 20－1 高松南
高松女商 －（分）－ 観音寺商
三本松 8－2 観音寺商
高松女商 17－1 高松南
【順位】①三本松②高松女商③観音寺商④高松南

中国

▽……山口県

▼男子1回戦（1試合）
徳山 18－11 宇部工

▽同2回戦
徳山 16－15 岩国
岩国商 20－5 野田学園
高森 14－10 小野田工
下関工 17－4 山口
下松工 19－8 防府商
下関西 13－12 高水
南陽工 16－11 下関一

岩国工 26—9 早鞆

▽同準々決勝

徳山 20—6 岩国商

下関工 26—7 高森

下松工 18—4 下関西

岩国工 22—9 南陽工

▽同準決勝

徳山 10—6 下関工

下松工 11—10 岩国工

▽同決勝

下松工 11—10 徳山

▼参考記録

下関中央工 16—9 下松工

下関中央工 14—5 徳山

▼女子1回戦（2試合）

徳山商 11—8 高森

岩国商 6—4 山口中央

▽同準々決勝

下関西 11—5 徳山商

高水 16—4 防府商

徳山 16—2 岩国

宇部女 7—5 岩国商

▽同準決勝

下関西 8—5 高水

徳山 7—6 宇部女

▽同決勝

徳山 12—9 下関西

▽……鳥取県（男子のみ）

▼男子予選リーグA組

倉吉産業 11—8 米子南

境工 16—7 倉吉産業

境工 22—9 米子南

▽同B組

境 17—13 倉吉工

境 23—9 日野産業

倉吉工 15—13 日野産業

▽同決勝トーナメント1回戦

境工 21—11 倉吉産業

境 19—17 倉吉工

▽同決勝

境工 18—16 境

近畿

▽……大阪府

▼男子第3次大会予選トーナメント1回戦

佐野工 22—11 桃山

堺工 26—8 三国ケ丘

北陽 23—10 岸和田

春日丘 15—14 城東工

桜塚 16—11 北淀

枚方 15—6 八尾

池田 16—8 都島工

富田林 11—10 上宮

▽同2回戦

佐野工 23—9 北陽

堺工 27—11 春日丘

桜塚 10—8 池田

枚方 18—4 富田林

▽同決勝リーグ

佐野工 18—8 桜塚

堺工 11—10 枚方

堺工 20—16 佐野工

枚方 17—8 桜塚

枚方 19—4 佐野工

堺工 16—11 桜塚

【順位】①堺工②枚方③佐野工④桜塚

▼女子第3次大会ベストフォア決定戦

春日丘 16—4 東大阪

鶴見商 12—5 八尾

豊中 8—6 岸和田

大谷 17—0 北淀

▽同決勝リーグ

春日丘 7—4 鶴見商

大谷 14—1 豊中

大谷 9—1 鶴見商

春日丘 8—4 豊中

鶴見商 10—3 豊中

大谷 4—3 春日丘

【順位】①大谷②春日丘③鶴見商④豊中

▽……奈良県

▼男子1回戦（3試合）

桜井商 15—9 十津川

東大寺学園 14—8 奈良

生駒 23—6 畝傍

▽同準決勝

東大寺学園 18—12 桜井商

添上 10—9 生駒

▽同決勝

添上 17—1 東大寺学園

▼女子1回戦（1試合）

十津川 16—2 郡山

▽同準決勝

十津川 14—3 添上

生駒 19—7 桜井商

▽同決勝

生駒 4—3 十津川

▽……和歌山県

▼男子予選トーナメント1回戦

御坊 13—4 粉河

県和歌山商 15—5 笠田

那賀 15—7 市和歌山商

桐蔭 8—6 新宮

▽同2回戦

御坊 7—5 県和歌山商

桐蔭 15—2 那賀

▽同敗者1次戦

笠田 25—6 粉河

新宮 15—6 市和歌山商

▽同2次戦

笠田 13—8 那賀

新宮 7—6 県和歌山商

▽同決勝トーナメント1回戦（準決勝）

御坊 11—9 笠田

新宮 11—10 桐蔭

▽同決勝

新宮 12—8 御坊

▼女子決勝リーグ

粉河 21—2 県和歌山商

御坊 7—4 貴和

粉河 8—5 御坊

貴和 16—2 県和歌山商

粉河 9—6 貴和

御坊 15—3 県和歌山商

【順位】①粉河②御坊③貴和④県和歌山商

東海

▽……静岡県

▼男子1回戦（1試合）

富士 29—7 吉原商

▽同2回戦

気賀 15—4 清水東

静岡農 13—7 沼津工

浜松南 19—4 静清工

裾野 20—9 天竜林業

清水商 22—2 二俣

沼津東 23—11 春野

静岡東 10—9 三島南

御殿場 18—9 富士

▽同準々決勝

気賀 13—9 御殿場

静岡農 12—7 浜松南

清水商 棄権 裾野

静岡東 12—11 沼津東

▽同準決勝

静岡農 9—8 気賀

清水商 19—4 静岡東

▽同決勝

清水商 17—10 静岡農

▼女子1回戦

藤枝西 11—2 裾野

清水西 10—1 沼津女

清水女 11—9 富士宮東

浜松南 16—1 御殿場

▽同準々決勝

静岡城北 8—5 藤枝西

清水西 10—1 吉原

清水商 14—1 清水女

二俣 10—9 浜松南

▽同準決勝

静岡城北 7—1 清水西

二俣 5—4 清水商

▽同決勝

静岡城北 13—8 二俣

▽……愛知県

▼男子決勝大会1回戦
豊橋商 23−10 中川商
愛知工 19−14 西尾
豊橋工 25−16 愛知商
明和 13−10 一宮工
若宮商 20−4 岡崎工
桜台 22−6 尾北
名城大附属 21−8 新城
中京 26−5 岡崎商

▽同準々決勝
中京 22−7 明和
豊橋商 25−13 若宮商
桜台 13−5 愛知工
豊橋工 10−8 名城大附属

▽同準決勝（代表決定戦）
豊橋商 8−6 桜台
中京 15−7 豊橋工

▽同決勝
豊橋商 17−15 中京

▼女子決勝大会1回戦
一宮 14−4 愛知商
若宮商 6−1 国府
岩津 5−4 春日井
淑徳 18−6 犬山
名女商 17−0 西尾
中川商 8−7 岡崎北
蒲郡 12−8 半田商
高蔵 7（分）7 豊橋商
抽せんで高蔵の勝ち

△同準々決勝
淑徳 7−6 一宮
中川商 13−5 岩津
名女商 18−6 若宮商
高蔵 5−4 蒲郡

▽同準決勝（代表決定戦）
高蔵 4−3 淑徳
名女商 12−4 中川商

▽同決勝
名女商 8−6 高蔵

北信越

▽……石川県

▼男子1回戦
星稜 11−10 松陵工
県立工 18−9 松任農
工大附属 17−6 小松工
小松商 9−8 二水
小松 13−9 金沢商
津幡 17−11 羽咋

▽同準々決勝
工大附属 20−7 小松商
県立工 12−10 星稜
金沢市工 16−7 小松
金沢泉丘 14−13 津幡

▽同準決勝
工大附属 9−5 金沢市工
金沢泉丘 12−9 県立工

▽同決勝
工大附属 15−7 金沢泉丘

▼女子1回戦
金沢商 10−2 星稜
松任 11−4 珠州

▽同準決勝
小松市女 10−2 金沢商
羽咋 7−3 松任

▽同決勝
小松市女 10−2 羽咋

▽……富山県

▼男子1回戦
二上工 不戦勝 富山東
高岡東 20−2 富山中部
富山工 22−9 富山
高岡 20−8 雄山
八尾 19−8 大沢野
氷見 15−7 富山商

▽同準々決勝
小杉 17−4 二上工
富山工 11−6 高岡東
八尾 15−10 高岡
氷見 12−11 高岡商

▽同準決勝
小杉 13−6 富山工
氷見 18−10 八尾

▽同決勝
小杉 16−11 氷見

▼女子1回戦（2試合）
有磯 5−3 富山女
清光 5−2 富山北

▽同準決勝
高岡女 15−1 有磯
小杉 19−6 清光

▽同決勝
高岡女 9−5 小杉

▽……福井県

▼男子1回戦（3試合）
武生商 19−10 高志
藤島 15−8 福井商
羽水 15−8 敦賀

▽同準決勝
若狭 19−4 武生商
羽水 16−7 藤島

▽同決勝
若狭 6−3 羽水

▼女子1回戦（2試合）
高志 6−4 羽水
武生商 5−2 藤島

▽同準決勝
若狭 8−5 武生商
福井商 9−3 高志

▽同決勝
福井商 4−3 若狭

▽……長野県

▼男子決勝リーグ
屋代 14−9 北佐久農
坂城 26−8 佐久
上田 13−9 屋代
坂城 29−8 北佐久農
上田 14−8 佐久
屋代 10−7 佐久
坂城 20−11 上田
上田 17−5 北佐久農
屋代 15−9 坂城
佐久 14−7 北佐久農
【順位】①坂城（得84、失42）②上田（得55、失42）③屋代（得48、失38）④佐久⑤北佐久農

▼女子決勝リーグ
小諸商 16−8 佐久
北佐久農 9−8 上田城南
佐久 20−9 松本美須々丘
小諸商 10−4 北佐久農
上田城南 13−12 松本美須々丘
松本美須々丘 5−4 北佐久農
小諸商 10−8 上田城南
北佐久農 8−5 佐久
小諸商 22−1 松本美須々丘
佐久 8（分）8 上田城南
【順位】①小諸商②北佐久農③佐久④上田城南⑤松本美須々丘

▽……新潟県

▼男子1回戦（準決勝）
柏崎工 8−1 巻
柏崎 21−6 新潟明訓

▽同決勝
柏崎工 11−4 柏崎

▼女子決勝リーグ
巻 6−2 新潟明訓
柏崎常盤 6−1 巻
柏崎常盤 19−2 新潟明訓
【順位】①柏崎常盤②巻③新潟明訓

関東

▽……群馬県（開催県）

▼男子1回戦（2試合）
前橋商 12−11 桐生
前橋工 16−8 甘楽農

▽同準決勝（代表決定戦）
富岡 17−5 前橋商
桐生工 26−3 前橋工

▽同決勝
富岡 12−7 桐生工

▼女子1回戦（2試合）
桐生女 14－10 高崎女
富岡 18－3 群馬女短大附
▽同準決勝（代表決定戦）
前橋市女 8－5 桐生女
高崎市女 14－8 富岡
▽同決勝
前橋市女 12－8 高崎市女

▽……栃木県

▼男子準々決勝（1回戦）
宇都宮工 22－11 鳥山
国学院栃木 13－5 足利
足利工 16－2 石橋
馬頭 11－8 足利商
▽同準決勝
国学院栃木 15－10 宇都宮工
足利工 － 馬頭
▽同決勝
国学院栃木 13－11 足利工
▼女子1回戦（2試合）
国学院栃木 18－2 足利商
栃木女 17－3 足利女
▽同準決勝
国学院栃木 12－7 小山城南
栃木女 25－3 馬頭
▽同決勝
栃木女 8－1 国学院栃木

▽……神奈川県

▼男子1回戦
相模台工 20－3 向の岡工
立野 13－3 武相
慶応 11－3 平沼
南 24－3 東
市立川崎工 12－11 翠嵐
多摩 9－7 横須賀市立工
横浜一商 24－7 新城
関東学院 7－5 横浜市商
法政二 14－12 市立川崎
県商工 15－6 横須賀桜ヶ丘
川和 12－11 大和
鎌倉学園 35－3 磯子工
三浦 12－3 法政工
神奈川工 13－7 横浜商工
日野 21－12 湘南通信
希望ヶ丘 8－6 県商工（定）
▽同2回戦
相模台工 28－2 立野
慶応 13－7 希望ヶ丘
横浜一商 17－6 多摩
南 22－9 市立川崎工
法政二 12－11 関東学院
三浦 11－6 日野
鎌倉学園 22－4 神奈川工
川和 17－5 県商工
▽同準々決勝
三浦 16－7 法政二
川和 12－10 鎌倉学園
相模台工 22－10 慶応
横浜一商 12－11 南
▽同準決勝（代表決定戦）
川和 7－6 三浦
相模台工 12－5 横浜一商
▽同決勝
川和 14－12 相模台工
▼女子1回戦
二俣川 6－1 東
南 14－5 立野
平塚江南 20－3 三浦
明倫学園 7－3 横須賀大津
北鎌倉 18－4 平沼
市立川崎 不戦勝 川和
上溝 12－2 京浜女大横浜
日野 不戦勝 横浜学園
▽同準々決勝
二俣川 10－5 市立川崎
南 5－5 北鎌倉
抽せんで南高の勝ち
上溝 12－3 日野
平塚江南 17－2 明倫学園
▽同準決勝
平塚江南 7－3 上溝
二俣川 9－3 南
▽同決勝
平塚江南 5－4 二俣川

▽……千葉県

▼男子1回戦（3試合）
佐原 29－7 鶴舞
小金 25－11 国府台
清水 15－5 鶴舞
▽同準決勝
木更津 18－16 佐原
小金 16－14 清水
▽同決勝
木更津 18－8 小金
▼女子準決勝（1回戦）
昭和学院 30－0 和洋附国府台
佐原女 8－2 八千代
▽同決勝
昭和学院 11－5 佐原女

東北

▽……青森県（男子のみ）

▼予選リーグA組
鯵ヶ沢 22－17 三本松
青森商 19－12 三本松
鯵ヶ沢 38－11 青森商
▽同B組
柏農 11（分）11 青森
青森 20－9 七戸
柏農 33－6 七戸
▽代表校決定戦
鯵ヶ沢 26－12 柏農

▽……山形県

▼男子決勝リーグ
東根工 12－6 寒河江
大石田 16－10 新庄工
大石田 10－4 東根工
寒河江 19－8 新庄工
東根工 26－8 新庄工
寒河江 9－7 大石田
▽優勝決定リーグ
寒河江 11－8 大石田
東根工 11－8 大石田
寒河江 7－5 東根工
【順位】①寒河江②東根工③大石田
▼女子決勝リーグ
竹田女 9－4 米沢女
竹田女 14－0 米沢東
米沢女 11－2 米沢東
【順位】①竹田女②米沢女③米沢東

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆
海外トピックス

―― 藤本　強 ――

グンメルスバッハが優勝

西ドイツ室内選手権

今年の西ドイツ室内シーズン最後を飾る南・北両リーグ勝者による決勝戦は、このほどドルトムントの体育館に一万三千という大観衆を集めてVfL・グンメルスバッハとSG・ルータースハウゼンの間で行われた。

グンメルスバッハは北部リーグで13勝1敗、ロイタースハウゼンは南部リーグで11勝3敗の成績をあげて優勝したものだ。

試合はシュミット、フェルドフォフ、コスメールらを擁するグンメルスバッハが立ちあがりからリードを奪い快勝、昨年の雪じょくを遂げタイトルを獲得した。

グンメルスバッハ 21（9—5, 12—8）13 ロイタースハウゼン

得	【グンメルス】		【ロイタース】	得
0	ポダク	GK	ポール	0
		GK	ジャック	0
0	K・ブラント	FP	プラムベク	1
6	シュミット	FP	シュマッケ	3
2	J・ブラント	FP	シャンディン	3
4	フェルドホフ	FP	ヘーニゲ	3
4	ボルター	FP	ハインデル	0
2	コスメール	FP	G・シュミット	0
0	ベヘル	FP	スペングラー	1
1	ケラー	FP	アーント	1
2	ウェステフ	FP	J・シュミット	1
21	（2）	7MT	（4）	13

（審・ラシュナイダー ライメール）

北リーグは
グンメルスバッハが独走

この決勝戦に至るまでは二回戦方式で8チーム総当りのリーグ戦が行なわれている。

グンメルスバッハはTHWキールに9—17で1敗しただけで、いくつかの僅少差の試合を除けば、いずれも大差で試合を決め、独走体勢を早々に決めて、そのままゴールに入った。

2位はTHWキール、ここはグンメルスバッハに1勝したが、下位チームとの対戦でとりこぼしがあり、ついに優勝することはできなかった。以下ハンブルガー・SV、GW・ダンケルセン、TUS・ウュリングホッフェン、RSV・ミョールハイム、BSVゾーリンゲン98、アイントラハト・ヒルデスハイムと続いた。

北リーグ成績表

	勝	分	敗	得	失
グンメルスバッハ	13	0	1	276	166
キール	10	0	4	210	177
ハンブルガー	8	1	5	196	154
ダンケルセン	7	1	6	240	200
ウェリングホッフェン	7	1	6	176	178
ミョールハイム	4	2	8	188	219
ゾーソンゲン98	4	1	9	156	205
ヒルデスハイム	0	0	14	180	323

この結果7、8位のゾーソンゲン98、ヒルデスハイムがブンデスリーガ（全国最上位リーグ）からおちることになった。

南リーグは激戦の末
ロイターハウゼンが勝つ

南リーグはSG・ロイターハウゼン、FA・ギョンピンゲン、それに本年ブンデスリーガ入りを果たし、躍進を続けているTSC・エスリンゲンの三つ巴の争いが開幕以来行なわれていたが、ホームゲームを完全にものにし、当面の相手チームとの試合の星はおとさなかったSG・ロイターハウゼンが連勝した。ロイターハウゼンはビジターとして、ビルケナウ、メーリンゲン、エスリンゲンで破れた3敗で終了し、優勝をした。FA・ギョッピンゲンはロイターハウゼンに1勝もできなかったことと下位のとりこぼしが致命傷となり、昨年どおり、2位に甘んじた。

特筆すべきはTSC・エスリンゲンの活躍である。今シーズン、ブンデスリーガ入りを果し、強豪に互して優勝争いに加わり、堂々と対戦をした。もともと古い伝統のあるチームだけにこの戦いぶりもうなずける。このあとにTV・ホッホドルフ、SV・メーリンゲン、TSV・ビルケナウ、R・F・ベルリン、TV・ヒョッテンベルグと続く。

6・7・8位は5勝9敗と勝点同率であったため、最下位決定戦を行なった。その結果はベルリン―ビルケナウ、ビルケナウ―ヒョッテンベルグの両試合が引分、ベルリンがヒョッテンベルグに勝つという激戦になった。

南リーグ成績表

	勝	分	敗	得	失
ロイターハウゼン	11	0	3	276	219
ギョッピンゲン	9	1	4	246	202
エスリンゲン	8	1	5	248	228
ホッホドルフ	6	1	7	209	225
メーリンゲン	5	1	8	220	235
ビルケナウ	5	0	9	204	231
ベルリン	5	0	9	189	220
ヒョッテンベルグ	5	0	9	248	228

最下位決定戦の結果ビルケナウ、ヒョッテンベルグがブンデスリーガからおちることになった。

デンマーク(女)が優勝

ユーゴ女子国際リーグ戦は4ケ国が参加して行われデンマーク、

ユーゴが同率となり、得失点差でデンマークの優勝に決まった。

デンマーク 10—5 西ドイツ
ユーゴ 16—8 チェコ
チェコ 8—5 西ドイツ
ユーゴ 12—11 デンマーク
西ドイツ 19—13 ユーゴ
デンマーク 10—9 チェコ

【順位】①デンマーク2勝1敗（得31、失26）②ユーゴ2勝1敗（得41、失38）③西ドイツ1勝2敗（得29、失31）④チェコ1勝2敗（得25、失31）

グンメルスバッハ アイスランドでも試合を

本誌既報の通り、西ドイツ本年度のチャンピオン・チーム、VfLグンメルスバッハはアメリカへ旅だったが、その日程は、まずアイスランドにわたり、その首都レイキャビックでアイスランドのトップチームと二試合を行なった。

アイスランドはあらゆる機会をつかまえ、強化のために努力しているようだ。グンメルスバッハはその後、十二日間をニューヨーク、トロント、モントリオールで試合を行なった。

チェコに惜敗 アイスランド

ヨーロッパの成長株・アイスランドは、世界上位への進出とオリンピック出場をめざし積極的な活動をつづけているが、このほど地元に世界チャンピオン・チェコを迎え大接戦を演じた。

チェコ 13（8—8、5—4）12 アイスランド

東ドイツ、デンマークを破る

東ドイツ 20（10—7、10—10）17 デンマーク

この試合東ドイツではチンメルマン、ガンショーの攻撃が光った。また東ドイツのGK、フリースケの巧技が眼についた。両GKともよく守り、7mTの成功率はきわめて低かった。

国際トーナメント会場にビデオ

我国でも、すでに大崎電気などのチームによってビデオ・コーダーの活用は行なわれているが、過日パリで行なわれた国際トーナメントの会場にオランダチームはビデオ・コーダーをもちこみ、開始から終りまでそれをまわし、主にコーチが、試合をみながら状況および気づいた点をメモがわりに、テープに吹きこんでいくということを行ない、他チームの特徴をつかむとともに、自チームの戦術のヒントにもようとしていた。今後この種の機械の活用は益々盛んになっていくであろう。

驚嘆の速さ、激しさ

～ルーマニア選手権観戦記・村田弘～

執念の激突、反則退場12回

ルーマニア選手権の最終日は6月1日ディナモ球技場(屋外)に三千人近いファンを集め、男子はディナモ・ブカレストとステアウア・ブカレストの宿敵同士の試合が行はれたが、ルーマニアで合宿中の全日本男子はこの試合をつぶさに観戦、村田弘監督は編集部あて次のようにその印象記を寄せた。

× × ×

▽女子
コンフェクチャ 21（10—7、11—6）13 テミシュアラ大

▽男子
ディナモブカレスト 12（5—5、7—6）11 ステアウア・ブカレスト

○……コートは40×21mの屋外。女子は、すでにコンフェクチャのチャンピオンが決まっており、好試合ではあったが、迫力に欠けた。注目されたのは両軍GKの動きで、攻撃へのボール出しは男子よりも巧いとさえ思えた。

男子は、毎年のごとく決勝を争うライバル同士。優勝よりも「ステアウアだけには勝ちたい」「ディナモには負けたくない」という意地と勝利への執念がムキ出しになっての対決であった。

はたして、スケールの大きな、力強い試合展開となり、しかもエキサイトした両軍は、あわせて12回という反則退場をマークする乱戦。日本では考えられぬことではあったが、ある関係者に云わせれば「この日の反則は少いほう」。常に20回近い退場がありコート上での乱斗も珍しくないという。

○……ステアウアは敗れても1位になれるのに対し、ディナモは〝勝利〟だけが狙いであった。

ディナモのディフェンスは1・5で〝ポジションでのマン・ツウマン〟はおそろしいほどの激しさ。結果から云えば、この日の勝利はその守りの強さにあったといえよう

ステアウアはディフェンスは同じシステムであったが、ポペスクが、ディナモのエース・ニカを徹底したマークで追ったため、全体のコンビネーションにしばしば乱れを見せた。

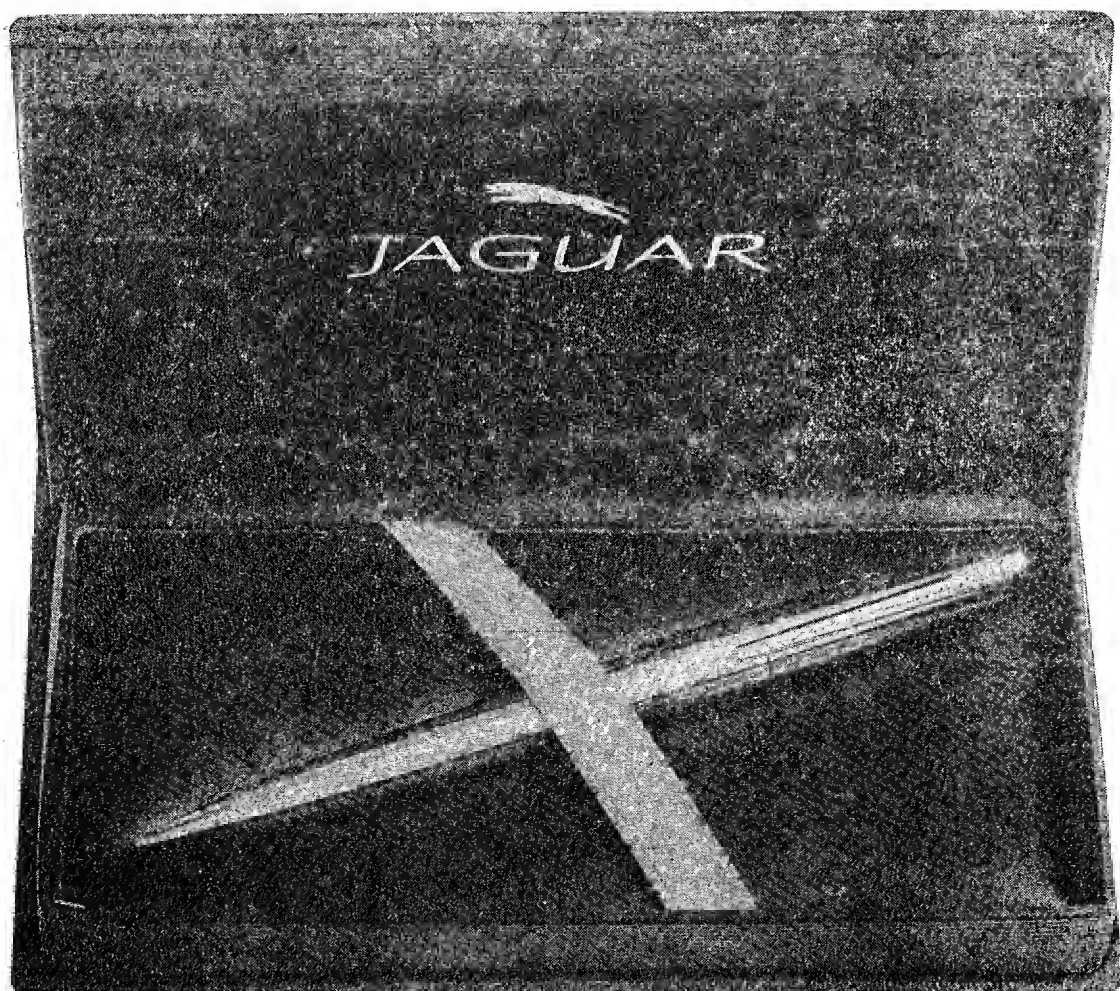
ニカはルーマニアの〝最優秀頭脳的プレイヤー〟といわれる選手だ。

○……攻撃面では、ディナモがニカがマークされながら好リード、ゲッターのサムンギ、モルバンらが活躍したのに対し、ステアウアは主砲グルイアが膝の故障から得意のジャンプシュートの威力が減じ好配球で定評のある巧者ガッも体調を悪くし、あまり試合に出ずとあってオテリア一人の奮戦だった。

試合は、ディナモがたえず先行していたが、後半16分、ステアウアは7—7から始めてリード、19分には11—8と逆に主導権を握って、そのまま押し切るかにみえた

○……ところが、勝負を捨てぬディナモは、残り10分から猛反撃に転じ、27分30秒、ステアウアが退場者を出しているスキに11—11と追いつき、タイムアップ30秒前、グルイアのシュートがポストに当たってはね返るのを拾って速攻、サイドからのシュートをマークした選手に腕をひっかけられて、これが7Mスロー。モルバンがみごとに決めて逆転勝ちを飾った。

○……両チームとも激しく速い動きは60分間止むことなくつづき、しかも、前述のような執念にみちた気力は、さすがに世界のトップチームの対決にふさわしいものでキープ力、中盤戦の進め方、ペヌ（ディナモ）、デンカー（ステアウア）両GKの技術などすべてが教訓であり、感激であった。



精かんなきみから
精かんな かれへ **贈りものはジャガー**

胸から出す、ノックする、書く………
三菱ボールペン《ジャガー》は、すべてに
スキがありません。
スマートなデザイン、軽快なキャップ
スライド、ムラのない書き味《ジャガー》
は、行動的な若いあなたに、ぴったりです

精悍なヤツ———

ジャガー

三菱ボールペン

¥2000・¥1000・¥800・¥500

書評

荒川清美 石井喜八 共著「写真と図解による ハンドボール」（大修館書店刊・定価四〇〇円）

まず本書の内容のあらましを紹介しょう。本書は大修館書店から出版されている「写真と図解シリーズ」の中の一冊として刊行（44年2月・刊）され四章と付録からなっている。第一章は「競技の概説と歴史」がとりあげられ、ハンドボールの競技の概要が述べられ、その後にハンドボール競技のなりたちが、世界と日本にわけ、非常に簡単に述べられている。第二章は「個人技術」がとりあげられている。この中は5節にわけられて、ボールを扱うという頭の中では、パスとキャッチそれにドリブルが豊富な写真によって詳説されている。次にボールを扱う練習法として、パスとキャッチ、ドリブルの練習法が述べられている。身体を扱う（ボディコントロール）の節ではランニング、いわゆるフットワークストップ、ターンなどハンドボール競技に必要な基本的な身体の動きがおりこまれている。次がシュートとその練習法であり、ここにも豊富な写真をもりこみ、種々のシュートを示している。次にゴールキーパーについての関係が述べられている。

第三章には「集団技術」として、いわゆるコンビネーションプレーが述べられる。防御と攻撃のコンビネーションプレーのごく基礎的なことが述べられている。その後に攻防への移動練習として、速攻と帰陣の練習法があり、眼新しい項目としてデッドタイムからインプレーへと称する項目の中で、レフェリースロー、スローイン、フリースロー、コーナースロー、7mスローの特殊な状況下での種々の注意が述べられている。

第四章は「ハンドボールの科学的基礎」として、からだのしくみハンドボールと体力・技術、ハンドボールに対する有効なトレーニング法がとりあげられている。これは類書にあまり見られない新しい試みであり、本書のもっとも特徴とするところであろう。

付録として、ハンドボールの審判、競技規則ハンドボール競技に関する研究の三項がある。

以上が本書の概要であるが、通読して、まず感じたのは、どういう読者層を想定して、本書が企画されたのだろうかということである。

第二章、第三章では、写真が多く盛りこまれており、内容は初心者向けと考えられ、あくまでも基礎的なものが中心となっていると考えられる。

第四章、付録では、内容が変りむしろ指導者を対象にしたような形になっている。

といって概説というのでもないこの対象のアイマイさが、新しく写真を豊富にもりこむという企画をもちながら本書の性格を不鮮明なものにしている。

一つには共著からくるところのさけらないものなのであろうが、一冊の本としてまとめられる以上はっきりと対象を絞ったものにしてほしいものである。総合的な概説書とするには、頁数が足りないのであろうから、対象は鮮明にすべきであろう。

以下気づいた点を列挙してみよう。第二章では、ボール扱いが表面に出ている。ハンドボールが球技である以上、これは当然であろう。この章では、個人技術に主体がおかれているのははっきりしていよう。ここで、守備の技術、それに現代ハンドボールの攻撃の基礎となるブロック、フェイントにも写真入りで眼を注いでほしかった。またシュートフォームなどは連続写真がぜひともほしいところである。独立した写真では、その瞬間の体の動きはとらえることはできても、その一瞬前・後のことは判らない。入門者が自らの欠点を直すにも、連続写真があれば、自らのフォームのその時点の写真とも比較することができようし、視覚に直接うったえ、きわめて、理解がすみやかに行なえよう。良い写真が得られたなら、写真解説でも、ちょっとあれば、十分に理解することができよう。

ボール扱いに関しては、連続写真的な写真もあり写真を使った効果がでている。入門者にも判り易く説かれている。それとともにボディーコントロールの項も同様のことが云えよう。

第三章では集団技術、いわゆるタクティクが述べられている。攻撃面では、ハンドボールの攻撃の基礎になる二人もしくは三人の攻撃に力点がおかれている。それ自体は解説も平易で判り易いが、もう一歩進めて、六人のセットオフェンスのフォーメーション例も豊富になっていれば、入門者がたとえできなくても、こういう方法があるということを知るだけでも、大きな効果があったであろう。図を示すだけでも十分であろう。

守備面でも同様のことが云える。六人の守備のフォーメーションは一枚写真で数例が示されているが、図によって各自の受けもつ位置その他を示すことにより、より理解は深まろう。

第四章は類書にない、全く新しい企画である。初めてのことなので、また研究途上であろうから、ハンドボールという性格がさほど明確にはでていないが好企画であり、今後進めていかなければならない方向であろう。

付録の審判の項は、単審制が主体になっている。本書が本年2月の刊行になっているのであるから、ぜひとも今年度から採用される複審制の内容がほしかった。

研究小史の項は科学的基礎とともに今後大いに発展させていかなければなるまい。ハンドボール関係文献目録なども作らなければいけないことになろう。

以上いろいろ注文をつけたが入門者およびその指導者には一読をすすめたい。特に本書にもりこまれている写真は種々に利用価値があろう。

（藤本）

ハンドボール研究の諸問題

チェコ体育研究所
S. ジャンサレク

1947年に7人制ハンドボールが紹介され、今日の隆盛を見るに至るまで、数多くの人々の質的および量的にハンドボールを発展させようという努力がなされてきた。

1963年のおわりには、チェコには、一万二千人の正規に登録されたハンドボールの男女選手がおり、更に五千人を越える未登録の選手がいる。この中には、15才以下の選手は入っていない。15才以下の若年令層への普及は学校、ハンドボール少年団（適訳ではないかもしれないが、ハンドボール部隊というのが原義）。先進的な組織を通して盛んに行なわれており、その数は多数にのぼるものである。

これら選手のうち、トップクラスは男女とも10チームからなる上級リーグを編成している。一方その上級リーグ入りをめざすチームは、それぞれグループ毎に分れ、リーグを組んでいるチームが男子は40チーム、女子は24チームある。

また、ハンドボール競技は教育学部および教育研究所の研究・教育課題になっている。中学校では統一的に体育の時間にとりあげられてから、時間は長いし、近年になって、大学課程の教育プログラムに組みこまれている。もちろん、高等学校の教育課程に採用されていることはいうまでもない。

これらを基礎にした強化策は効果をうみ、チェコをハンドボール界のトップチームに引きあげるようになった。これらの強化・普及にもっとも役だったのは、審判とコーチの研修である。毎年、二週間二級コーチのための講習を行ない、更には、一級コーチ、審判のための講習をずい時行なっている。これは主にプラハの体育研究所を中心にして行なっている。この講習会には文字通り、現代のトップクラスのプレーヤー、コーチたとえば、ケーニッヒ、ヴィチャなども参加し、トッププレイを見せ、研修を行なっている。また秋にはハンドボール学校も開かれている。

体育学研究所（プラハおよびブラティスラバ）ではハンドボール専攻のコースが大学に設けられており、ハンドボールをより広く、より深く研究している。ここではハンドボールに関する問題、理論方法を研究している。現在プラハでは、15人、ブラティスラバでは9人の大学生がハンドボール専攻のコースに所属している。

体育学会誌にも多くのハンドボールに関する論文がよせられている。このような種々の方面での施策が今日のチェコのハンドボールの隆盛の原因となっている。

現在我々が研究しようとしている第一の方向は競技の流れということである。この中では、まずハンドボールの競技が本来もっている根源的な特質として、他競技といかに異っているかを明らかにすることである。これを通して、ハンドボールの流れを徹底的に究明することが可能になろう。

ハンドボールは攻撃、守備、その移行期の三つの時期に分けられることは明らかであろう。競技のどの一瞬をとってみても、このどれかに分類し得る。

ボールをもっているか、ボールを自己のチームの管理下において いる場合、これが攻撃時になることは云うまでもあるまい。この時の目的は当然のことながら、得点をあげるということである。ハンドボールをはじめ球技では、ボールをもつことは大きな意味をもっている。単に得点をあげる可能性があるばかりでなく、ゲームの主導権を掌握していることになるからである。守備側のフォーメーションをある程度までは意のままに動かすこともできるし、攻撃を速くするか遅くするかというようなゲーム運びでもボール保持チームの意のままになる。圧倒的に有利な時期となる。あらゆる戦術を駆使し、有利さをより一層効果あるものにしなければならない。得点をあげるという目的以外にこの時期がおわるのは、相手にボールが移動してしまう場合である。これ

によって有利な立場は全く逆に不利な立場に変る。つまり相手チームにボールが渡るか、もしくは相手チームがボールを管理下におくかする状態になる。つまり、守備の時期である。

守備期の最大の目的は、相手のゴールを妨げることである。この際最終的な目的はゴールをさせずに不利な守備期をのりきり、相手のボールを自己のものにし、自分を有利な立場にもっていくことにある。これらの両時期のあり方は他の競技と同じ性格の面が強い。

ところが、ハンドボールでは、そのどちらにも属さない時間が、ある時は非常に短時間ある時はかなり長い期間続くことがある。つまり、どちらのチームもボールを完全に自己の管理下にもっていない時期である。いうならば中間期とでもいう時期になろう。中間期なしにすぐに攻撃期から守備期に移る場合が非常に多いが、この中間期の処理は非常に重要な課題となる。この時に心がけるのは、一刻も早く、中間期からぬけでて、攻撃期に入るということである。いいかえるならば、ボールを自己の管理下に入れるということである。ハンドボールでは、攻撃期から中間期を経て、また攻撃期に入ることができるが、この点では他競技と異なる面がある。バスケットボールでは、攻撃は30秒しか許されないし、バレーボールでは、3回しかボールに触れることは許されていない。競技遅延の反則はあるが、ハンドボールでは、何回でも、かなりの時間をかけて、攻撃を行なうことが可能である。

攻撃と守備は相対的なものであり、この両時期のフォーメーションはまさに相対的なものである。あくまでも主導権は攻撃側にあるが、相手がひいているフォーメーションによって、それぞれがフォーメーションを変化させていくということが行なわれなければならない。これは根本的に分析していくことこそハンドボール研究の第一歩となろう。

競技に於いて、これらを分析した結果、次のようなことが重要な視点となろう。

1、技術について（競技の種々の状況の中で形として現れる。）

2、戦術について（競技の種々の状況の中で選択として現れる。）

3、競技能力の体力的な側面について、これは競技の状況の中で示されるいわゆる種々の体力の面についてである。

4、精神面について、精神力についてである。

このような視点をもって、競技者とチームの能力をたかめていくことが強化にとって、もつとも重要なことになってこよう。

ハンドボールの発展を考えた場合、二つ面で、この視点を押し進めていく必要がある。一つの方向は選手の能力と性格を高めていくこと。もう一つの方向は受身な参加者、つまり観衆を以上のような視点から、高めていくことも重要である。前者が必要なことは云うまでもないが、後者がハンドボール界の発展に何よりも必要なことである。いかに選手の能力が高まろうとも、その理解者が少なくては発展は望めない。

そこでチェコハンドボール界は後者にも多いに気を配った。もちろん前者の発展にはより以上多くの努力を行った。選手が高度のプレーを見せれば、観衆の見る能力はあがる。観衆の見る能力があがれば、より高度のプレーが望まれるそれに選手が答え、更に高度のプレーが開発される。このように、互に能力を高めあうことができる。

高度のスピード、すばやい眼の力、とっさに回転する頭、これらは他の球技でも、必要とされているものである。この中でも眼、特にボールおよび味方、相手を一瞬のうちに見て、もっとも有効な攻撃・守備につく頭と体の動き、これがもっともハンドボールで高められるければならない能力であろう。

いいかえるならば、競技の状況をとっさに判断する能力、これがハンドボール競技に一番必要なものである。競技の状況を解決する能力は相手のやはり状況判断能力と相対的なものである。相手がどう動くかをとっさに判断し、味方のたすけを得、その状況を判断、より有利に展開させていくようになる。

これは判断力とそれに対応する動き、この二つがあってはじめて一人もしくは一チームの能力として完成されるものである。

このような能力の開発は単にハンドボールだけでなく、他競技とも共用することのできるものである。

しかし、ハンドボールは特殊なトレーニングが必要である。そのためには、多くの解決すべき問題が山積している。

まず実際的な理論を多くつくりあげていくことが必要であろう。そのためには、コーチ、レフェリーを含め、関係者が努力していくことが必要である。

このシンポジュームにあたって、現在我々チェコ体育研究所で問題としている問題点を提出しておきたい。なお、各国の努力で解決すべき問題が山積している。これらを解決して、より高度のハンドボールが達成されるよう努力を続けていきたい。

（抄訳　藤本強）

松山商大、西部地区も制す

中四国学連と九州学連による第19回西部日本学生選手権は6月14・15の両日、広島商大球技場に14大学（中四国9、九州5）が参加してトーナメントで行われた。

ベスト・フォアのうち3校を九州勢が占めたが、中四国勢で唯一校勝ち残った松山商大が春季リーグの好調をこの大会にも持続、準決勝で九州産大に逆転勝ちしたあと、決勝でも3度目の優勝を狙う西南学院大に立ちあがりからリードを奪い完勝、初優勝を飾った。

中四国代表の優勝は2年連続13度目。

▽1回戦

九州産業大（九州）28—10 広島工大（中四国）
松山商大（中四国）20—12 熊本商大（九州）
近畿大（中四国）29—12 愛媛大（中四国）
鹿児島大（九州）16—14 広島大福山（中四国）
広島商大（中四国）15—14 広島大（中四国）
九州大（九州）23—13 香川大（中四国）

▽準々決勝

松山商大 20—10 山口大（中四国）
九州産業大 23—16 近畿大
鹿児島大 23—17 広島商大
西南学院（九州）18—13 九州大

▽準決勝

松山商大 18（10—7、8—10）17 九州産業大
西南学院 21（14—8、7—9）17 鹿児島大

▽3位決定戦

鹿児島大 25（12—8、13—14）22 九州産業大

▽決勝

松山商大 23（13—5、10—7）12 西南学院

第10回全九州学生・詳報

（一部既報）5月17、18日。宮崎県体育館。参加10大学によるトーナメント。

▽1回戦（2試合）

九州産業大（福岡）16（10—7、6—8）15 宮崎大（宮崎）
熊本商科大（熊本）19（9—5、10—3）8 福岡大（福岡）

▽準々決勝

西南学院大（福岡）12（5—7、7—4）11 九州産業大
福岡教大（福岡）23（14—8、9—6）14 東海大（福岡）
鹿児島大（鹿児島）26（14—2、12—5）7 福岡工大（福岡）
熊本商科大 13（7—4、6—8）12 九州大（福岡）

▽準決勝

西南学院大 12（6—5、6—3）8 福岡教大
鹿児島大 18（13—5、5—7）12 熊本商科大

▽3位決定戦

熊本商科大 18（9—5、9—6）11 福岡教大

▽決勝

西南学院大 15（9—7、6—6）13 鹿児島大

好調な松山商大

松山商大（愛媛）の好調な試合ぶりがつづいている。

5月の中四国学生で、初めて中国勢打倒をはたし全勝優勝、その余勢をかって第19回西部学生でも山口大、九州産業大、西南学院といった強豪を連破、初優勝をとげた。

各地ともいささか優勝が〃常連化〃している最近の学生界だけに松山商大の抬頭は大いに注目してよいものがあろう。

同校の部歴はまだ浅い。8年前に発足、中四国学生連盟に加盟したのは40年秋から。41年秋2部制となって2部に組み入れられ1部にあがったのは昨年春のことだ。

それが、わずか1年で〃西部の星〃にまで成長したのは、1・2年生に経験者が増え、どちらかと云えば愛好者の集りだったこれまでとちがい、はっきり〃勝負〃を意識するチームに体質が変わって来たことと、昨夏、地元でインカレを開いたのが大きな刺激となった2点にあろう。

春の中四国学生で3連ぱを狙っていた岡山大に逆転勝ちしてすっかり自信をつけ、西部学生でも準決勝で九州産大に大苦戦しながらどたん場で勝利を握り、決勝では九州学生1位の西南学院を押しまくった。いちど波に乗ればすばらしい力を示す若さが感じられる。

越智武部長・監督（日本協会理事）は『1年生に経験者が多く、2年生の有力選手が伸びているので秋あたりにはよい成績を得られると思ったが、今シーズンからこのように好調を示せるとは考えていなかった。選手たちが自信をつけたのは大きいが、全国のトップレベルに比べればまだまだ欠点も多い。

全日本学生で上位進出を果たすためにも、選手がそうした点を直接感じとれるように夏休みを利用して関西から東海へかけて遠征、いっそう努力したい』と斗志のなかにもたずなを引きしめることを忘れていない。今後の成長をみまもりたい。（S）

ハンドボールなど実施 少年スポーツ学校

国立競技場（東京）では小学校高学年（4年生）以上の児童を対象に7月から来年3月まで総合的な「少年スポーツ学校」を開設、ハンドボール、体操、陸上競技など6種目を行なうほか、各種競技会の見学なども予定されている。

山田理事、訪欧の途へ

日本協会・山田計理事（大阪協会副会長・全日本教職員連盟理事長）は、7月7日からマドリットで開かれる第16回IHF審判講習会出席のため6月22日午前10時フランス航空機で羽田から出発した。ユーゴで全日本男子に合流。

訂正

▽本誌前号19頁　関東学生2部順位　③慶応5勝2敗は4勝3敗の誤まり。したがって3位として慶応、防衛大、明星が並列。

▽同30頁　九州選手権の項で「熊本代表以外が優勝したのは初めて」とあるのは「熊本・大分代表以外が……」に訂正。

芝浦工大3年ぶりに優勝

関東学生新人戦

第7回関東学生新人戦は5月24、30、31の3日間、駒沢第一球技場で男子は21校によるトーナメント、女子は4校のリーグ戦によって行われた。

男子はリーグ戦経験者を揃えた芝浦工大が、さすがに安定した力を示し快勝、3年ぶり5度目の優勝を飾った。女子もリーグ戦の主力で固めた東女体大が、圧倒的な強味をみせ初優勝した。

▽男子予選トーナメント1回戦
青山学院 30－9 武蔵工大
千葉工大 11－6 東京理科大
立教 36－6 独協
明星 21－12 千葉商大
東京教大 25－5 東海

▽同2回戦
日体 33－2 成蹊
早稲田 21－5 防衛大
日大 15－8 青山学院
法政 29－8 千葉工大
芝浦工大 28－11 立教
横浜商大 9－4 上智
明星 22－17 国士館
中央 27－6 東京教大

▽1回戦敗者による復活戦2次戦
東京理科大 棄権 武蔵工大
千葉商大 棄権 東海

▽決勝トーナメント1回戦
早稲田 21－1 東京理科大
横浜商大 不戦勝 千葉商大

▽同2回戦
日体 7－5 早稲田
法政 － 日大
中央 30－10 明星
芝浦工大 44－4 横浜商大

▽同準決勝
法政 21（10－7, 11－9）16 日体
芝浦工大 21（9－7, 12－7）14 中央

▽同3位決定戦
中央 23（11－7, 12－8）15 日体

▽同決勝
芝浦工大 22（12－8, 10－4）12 法政

【法政】		得
GK	川畑（②御影工）	0
FP	荒井（②明星）	5
	中村（②鎌倉学）	0
	小林（②明星）	1
	小石川（②横浜南）	0
	川相（②天城）	0
	加藤（②竜崎一）	0
	田上（①熊本商）	6
	吉野（①神代）	0
	長谷川（①浜松南）	0
	田口（①竜崎一）	0
7MT	（1）	12

【芝浦】		得
GK	石川（②浦和市）	0
FP	明石（②徳山）	4
	大江（②岩国工）	6
	加藤（②横浜東）	1
	木全（②明星）	1
	新実（②桜台）	6
	細江（②益田）	0
	森（②桜台）	4
	井出（②鶴ヶ丘）	0
7MT	（1）	22

（注）○の内数字は学年

▽女子リーグ戦
日体 25－6 日女体大
東女体大 15－7 東京教大
東女体大 19－7 日女体大
日体 13－8 東京教大
日女体大 12－6 東京教大
東女体大 17－8 日体

【順位】①東京女体大②日体大③日女体大④東京教大

福岡は九州産大が優勝

福岡学生新人戦（トーナメント）は5月31、6月1日の両日8大学が参加して行われ、九州産業大が決勝で東海大を降し首位となった。

▽1回戦
九州大 没収試合 久留米工短大
東海 17－13 福岡教大
福岡大 18－13 西南学院
九州産大 24－13 福岡工大

▽準決勝
東海 16（5－5, 8－8, …, 2－1, 1－0）14 九州大
九州産大 17（9－6, 8－8）14 福岡大

▽3位決定戦
福岡大 20（8－2, 12－5）7 九州大

▽決勝
九州産大 21（11－7, 10－8）15 東海

明大が初優勝

早慶明室内

第9回早慶明定期戦は6月14日東京・早大記念会堂で行われ、明大が1部校の貫録を示して初優勝した。早大の3連勝はならなかった。

明大は野村、藤井らがシャープな動きで2試合とも前半で勝負を決めた。早慶両校は春の不振から立ちなおっていず低調な試合ぶりで集ったOBを落たんさせた。

明治 34（14－6, 20－5）11 慶応
明治 18（10－1, 8－10）11 早稲田
早稲田 31（17－9, 14－10）19 慶応

【順位】①明治②早稲田③慶応

関学、早大戦に快勝

伝統の第24回早稲田－関学定期戦は6月20日、大阪市中央体育館で行われた。

今シーズン不調の早稲田に対して関学は立ちあがりから気力にあふれた攻守でリードを奪い5年ぶりに快勝。通算成績は関学の15勝9敗。

立教、同志社の反撃かわす

第19回立教－同志社大定期戦は6月14日京都市体育館で行われ前半のリードを巧く活かした立教が辛くも勝ち5連勝、通算成績は立教の11勝8敗

立教 20（8－6, 12－11）17 同志社

各地の記録

常盤工業、5連勝遂ぐ
好調のスタート田村紡

第5回東海実業団選手権は6月1、8の両日岐阜県営体育館に東海4県と福井県から男子15、女子3チームが参加して行われた。

男子は4組による予選リーグのあと各組勝者によって決勝トーナメント・2位によって5～8位決定トーナメントが争われた。ベスト4には予想どおり常盤工業（岐阜）、富士鉄名古屋（愛知）、北陸電力（福井）、本田技研（三重）が進出。決勝は常盤工業と、富士鉄を大接戦の末降した本田技研が5年連続して対戦、常盤が前半から圧倒的な強味を発揮、5連勝した。

女子は、豊田紡（岐阜）の棄権から3者2回戦総当りとなり、メンバーを一新させた田村紡（三重）が順調に白星を重ね優勝、5度目の栄冠を握った。

▽男子予選リーグ各組順位【A組】①常盤工業（岐阜）②日本碍子（愛知）③日本合成ゴム（三重）【B組】①北陸電力（福井）②三菱油化（三重）③トヨタ車体（愛知）【C組】①富士製鉄名古屋（愛知）②大同製鋼（愛知）③大洋紡（岐阜）【D組】①本田技研（三重）②常盤商事（岐阜）③静岡日野自動車（静岡）

▽5・6位決定予備戦

大同製鋼 21—16 常盤商事

日本碍子 23—21 三菱油化

▽5・6位決定戦

大同製鋼 25—14 日本碍子

▽決勝トーナメント（準決勝）

本田技研 17（11—5、2—8……2—2、2—1）16 富士製鉄名古屋

常盤工業 21（12—4、9—8）12 北陸電力

▽3・4位決定戦

富士製鉄名古屋 18（8—8、10—9）17 北陸電力

▽決勝

常盤工業 27（15—5、12—8）13 本田技研

▽女子リーグ

大洋紡（岐阜） 8（5—3、3—2）5 ブラザー工業（愛知）

田村紡（三重） 10（3—1、7—2）3 大洋紡

田村紡 16（7—5、9—4）9 ブラザー工業

田村紡 14（6—3、8—4）7 大洋紡

ブラザー工業 7（4—1、3—5）6 大洋紡

田村紡 17（9—2、8—1）3 ブラザー工業

【順位】①田村紡勝点8（4戦全勝）②大洋紡勝点2（得24、失36）③ブラザー工業勝点2（得24、失47）④豊田紡棄権

高校男子は富岡（群馬）

▼第3回埼玉・茨城・群馬3県対抗大会（5月・富岡高）

▽高校男子リーグ

富岡（群馬） 15—8 全埼玉（埼玉）

富岡 15—8 石岡一（茨城）

全埼玉 19—7 石岡一

【順位】①富岡②全埼玉③石岡一

▽同女子リーグ

前橋市女（群馬） 7—7（引き分け） 全埼玉（埼玉）

八郷（茨城） 11—5 前橋市女

全埼玉 19—7 八郷

【順位】①全埼玉②八郷③前橋市女

▽一般男子対抗戦

全埼玉（埼玉） 29—14 光電工業（群馬）

自衛隊勝田（茨城） 21—9 光電工業

▽教員リーグ

茨城 24—15 群馬

埼玉 19—8 茨城

埼玉 22—11 群馬

【順位】埼玉②茨城③群馬

塩山ク、山梨大降し優勝

▼第2回山梨県社会人選手権（6月・甲府）＝男子のみ

▽1回戦（2試合）

山梨大 16—9 五葉ク

塩山ク 11—9 甲府ク

▽準決勝

塩山ク 11—6 桜ク

山梨大 19—13 教員ク

▽決勝

塩山ク 12（7—3、5—8）11 山梨大

足利と栃木女勝つ

▼栃木県高校大会（5月・足利商）

▽男子準々決勝

足利 12—4 鳥山

馬頭 10—7 足利商

国際院栃木 19—3 石橋

足利工 11—6 宇都宮工

▽同準決勝

足利 12—9 馬頭

足利工 13—12 国学院栃木

▽同決勝

足利 11（7—5、4—5）10 足利工

▽女子予選リーグA組

栃木女 9—5 小山城南

小山城南 15—5 馬頭

栃木女 26—4 馬頭

▽同B組

国学院栃木 22—1 足利商

足利女 7—2 足利商

国学院栃木 11—5 足利女

▽同決勝

栃木女 8（5—3、3—1）4 国学院栃木

呉工が初優勝飾る

▼第22回広島県高校総体ハンドボール（6月・修道高）

▽男子準々決勝

三原工 21—17 呉三津田

尾道 23—6 盈進

呉宮原 16（分）16 広

抽せんで呉宮原高の勝ち

呉工 18—9 呉港

▽同準決勝

三原工 15—6 尾道

呉工 18—10 呉宮原

▽同決勝

呉工 11（4—3、7—4）7 三原工

呉工は初優勝

▽女子準々決勝

広島一女商 16—5 呉商

豊栄 7—2 白木

呉宮原 10—6 進徳

山陽女 17—1 戸手商

▽同準決勝

広島一女商 20—1 豊栄

山陽女 11—1 呉宮原

▽同決勝

山陽女 5（2—1、3—1）2 広島第一女商

山陽女高は10年連続優勝

一般は千代田印刷機製造

▼第3回東京城北オープントーナメント（4月・早稲田学院高）

▽一般男子準々決勝

陵東ク 15—6 帝京タイガース

早大学院ク 21—8 朝霞ＯＢＣ

千代田印刷機製造 27—10 ホクエン・ク

神代ク 11—8 中大附ク

▽同準決勝

早大学院ク 9—8 陵東ク

千代田印刷機製造 19—15 神代ク

▽同決勝
千代田印刷 24—15 早大学院ク
千代田印刷機製造は初優勝

▽高校男子準決勝
中大附 13—4 四谷商
府中 8—6 鷺宮
神代 17—2 東海大附
都立三商 8—6 明星

▽同準決勝
中大附 18—8 府中
神代 17—6 都立三商

▽同決勝
中大附 11—3 神代
中大附属高は2連勝

▽女子準々決勝
小平 11—1 四谷商
神代 8—4 赤羽商
佼成 12—5 J・R・C
桜水商 4—3 府中
(注)J・R・C以外は高校チーム

▽同準決勝
神代 7—6 小平
佼成 5—4 桜水商

▽同決勝
神代 9—3 佼成
神代高は初優勝

笠間、宿願の制はなる

▼茨城県高校春季大会(5月・石岡一高)

▽男子準々決勝
水戸工 11—10 茨城
石岡一 記録不明 石岡商
笠間 10—8 竜ケ崎一
麻生 記録不明 土浦一

▽同準決勝
笠間 13—12 麻生
石岡一 23—6 水戸工

▽同3位決定戦
麻生 18—10 水戸工

▽同決勝
笠間 12(9—4、3—2)6 石岡一

▽女子準々決勝
石岡二 4—2 麻生
水海道二 13—4 太田二
笠間 5—4 鉾田二
八郷 13—5 日立二

▽同準決勝
水海道二 記録不明 石岡二
八郷 5—2 笠間

▽同3位決定戦
笠間 5—3 石岡二

▽同決勝
八郷 8(2—1、6—2)3 水海道二

一般は勝田自衛隊

▼茨城県一般選手権(6月・茨城大)=男子のみ

▽準々決勝
勝田自衛隊 29—7 土浦ク
茨城大 18—5 水戸工ク
原子力研究所 33—1 平沼精器
茨城日立 20—19 茨城ク

▽準決勝
勝田自衛隊 19—11 茨城大
原子力研究所 24—9 茨城日立

▽決勝
勝田自衛隊 24(13—8、11—11)19 原子力研究所

金沢市役所が優勝

▼石川県春季選手権(5月・金沢)

▽一般男子準々決勝
金商ク 20—14 石川製作所
金沢工大 18—5 小松製作所
金沢市役所 29—11 金沢美工大
県工ク 15—13 金沢高専

▽同準決勝
金沢工大 12—11 金商ク
金沢市役所 9—8 県工ク

▽同決勝
金沢市役所 9(3—5、6—3)8 金沢工大

▽高校男子決勝
金沢市工 11(5—4、6—3)7 金沢泉丘

▽同女子決勝
小松市女 10(3—0、7—0)0 羽咋

宗形製作所が全勝

▼第11回大阪実業団リーグ(5月大阪)
大山商会 21—5 日立マクセル
宗形製作所 25—10 美津濃
大山商会 25—6 美津濃
宗形製作所 35—5 日立マクセル
大山商会 26—11 大阪ガス
大阪ガス 41—18 美津濃
宗形製作所 20—9 大山商会
美津濃 16—13 日立マクセル
大阪ガス 不戦勝 日立マクセル
宗形製作所 37—11 大阪ガス
【順位】①宗形製作所4戦全勝②大山商会3勝1敗③大阪ガス2勝2敗④美津濃1勝3敗⑤日立マクセル4敗

愛知協会長に内川氏

愛知協会では、このほど会長として内川悟氏(富士製鉄名古屋製鉄所副所長、同社専務取締役)を迎えた。

福島協会長に宗形氏

福島協会は、このほど空席の会長に宗形守敏氏(東北宗形製作所取締役副社長)を新任した▽会長 宗形守敏▽副会長 田子泰依▽理事長 熊田栄一

なお、事務局は郡山市方八町2の6の9 熊田栄一氏気付(電・〇二二九二(2)九一六三)

埼玉協会長には堀氏

埼玉協会では、このほど会長として堀硯一氏(埼玉エルビーKK社長)を迎えた。

鹿児島協会理事長に古市氏

鹿児島協会は新役員を次のように決め発表した。
▽会長 増田静▽副会長 初瀬哲夫▽理事長 古市寿夫▽書記 堀之口貞男

編集後記

〇……ルーマニアでの選手団とにかく無事に合宿をあげたとのこと、まずは良かったなあということです。その後の試合もマアマアの成績、ヨーロッパ合宿の成果はあったと云うべきでしょう。

今後に残された課題はどのようにして、これを発展させ、技術を向上させ、世界選手権に結びつけていくかと云うことです。

選手団だけでなく、日本のハンドボール界をあげての課題でしょう。

またこれらの選手団を世界に送るための基金も好調にすべりだしてほしいと望んでいます。

色々な問題はありましょうが今ハンドボール界にとって一番重要なことは何か、この答は関係者一致したものが得られる筈です。

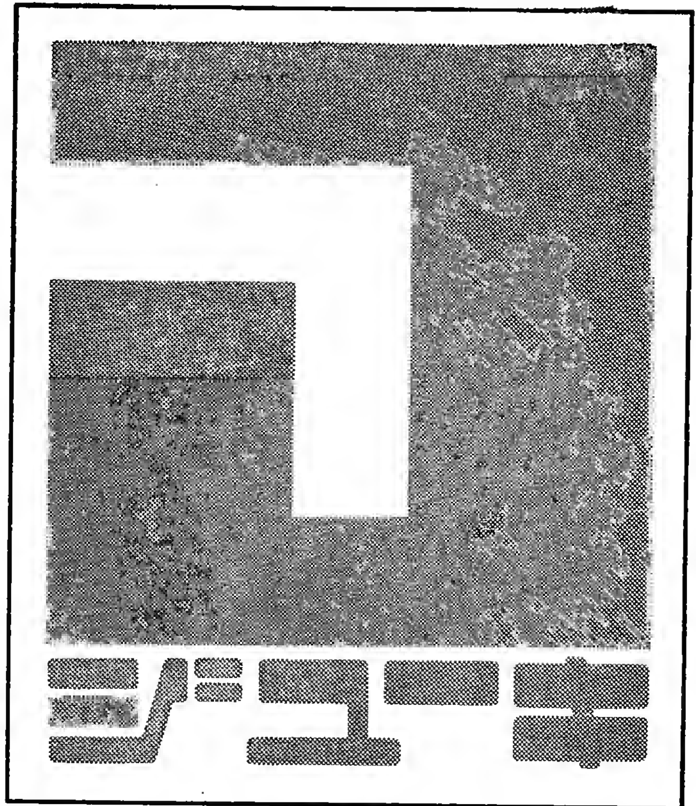
その目標に向って、一致団結しこまかな行きがかりは捨てて進むべきでしょう。

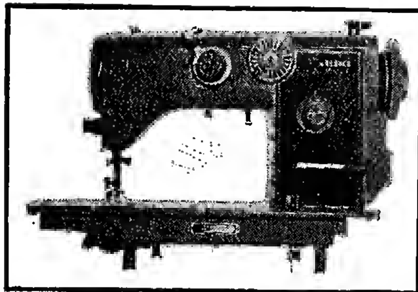
〇……紙上討論・原稿の募集をしてもどうも編集部の一人ずもうにおわる場合が多いようです。

投稿も何か限られた方のものしか集りません。この雑誌は何でもものの云える百家争鳴の場にしたいものと考えているのです。どうぞどしどし自分の考えを出して下さい。

(TS・F)

ミシンはマークでお選び下さい





HZD－956型
ダイカスト・フルオートジグザグ

東京重機工業株式会社
本社工場　東京都調布市国領町８丁目２番地ノ１電話（480）1111番（大代表）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第六十六号
昭和四十年六月[illegible]日　第三種郵便物認可
昭和四十四年六月二十五日印刷　昭和四十四年七月一日発行
発行所　日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五
電話　大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人　保坂周助
定価百五十円
(年間購読11回・千二百円)